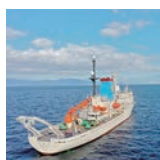


寄稿
一般社団法人 日本海洋学会の発足	01
石井 雅男会員 文部科学大臣表彰科学技術賞	01
安田 一郎会員 文部科学大臣表彰科学技術賞	02
渡部 雅浩会員 文部科学大臣表彰科学技術賞	03
植松 光夫会員 TOS フェローに選出	03
情報
若手武者修行セミナー報告	04
サイエンスアゴラ報告	06
若手海外渡航援助報告	08
海洋中手会報告	12
学界動向	13
JOMOCA 表彰論文	17
JO・海の研究の目次	17
カレンダー	18
学会記事
秋季大会開催通知	18
各賞推薦依頼	22
連載
アカデミア メランコリア(第42回)	26



寄稿 ①

一般社団法人 日本海洋学会の発足

日本海洋学会 会長 江淵 直人

本年4月1日より、日本海洋学会の一般社団法人としての活動がスタートしました。

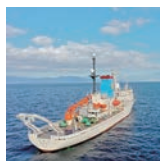
学会の法人化は、日本海洋学会の発展のためには避けて通れない道として、近年の学会運営における懸案事項でありました。2020年度春季評議員会において、法人化検討開始が承認されました。2021年度秋季評議員会において、基本方針についての議論が行われ、具体案の作成が承認されました。2022年度秋季評議員会で具体的な骨子案が承認され、これに基づいて、会員への意見聴取が2022年10-11月に行われました。2023年度春季評議員会および総会において定款案・細則案をお示しし、会員の皆様からご意見を募集しました。いただいたご意見をもとに定款・細則の最終案を作成し、2023年度秋季評議員会および臨時総会において、日本海洋学会の一般社団法人への移行と定款および細則決定の決議をいただきました。2024年1月22日に一般社団法人日本海洋学会の登記の手続きを完了し(形式的にはこの日が新法人の設立日となります)、この4月から実質的な学会活動を新法人へと移行すること

なりました。

日本海洋学会が法人格を持つことにより、社会的認知度や信用の向上が期待できると考えています。法人化の実現に対する歴代の学会執行部のご努力と会員の皆様のご支援に心から感謝します。

昨年度末までの日本海洋学会の会員、評議員、役員、委員会、支部、研究会、ワーキンググループなどはそのまま新法人に引き継がれます。移行に際して、会員の皆様のお手を煩わすことは最小限にとどめたいと考えています。ただし、6月に学会HPの会員マイページの更新を予定しており、登録事項の確認などの作業をお願いする可能性があります。

一般社団法人に移行することにより、学会運営の形に若干の変更は生じますが、春季・秋季大会や各種研究会・委員会、定期刊行物、表彰、若手支援事業などの学会活動はこれまで通り進めていきます。会員の皆様の研究の発展に少しでもお役に立てるような学会運営に努めてまいりますのでご協力をお願いいたします。



寄稿 ②

石井 雅男会員が 文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞

日本海洋学会 会長 江淵 直人

この度、気象庁気象研究所の石井 雅男会員が令和6年度の文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞され、4月17日に授賞式が行われました。受賞対象となった業績は「炭酸系精密観測技術

の開発による海洋の二酸化炭素動態の研究」です。

化石燃料の大量消費や森林破壊による莫大なCO₂排出によって大気CO₂濃度が増加し、地球温暖化・気候変化・海洋酸性化が進



行っています。全球の炭素循環における海洋の役割を定量的に明らかにするためには、炭酸系の精密な観測が必要不可欠です。

石井会員は、炭酸系の精密測定技術が確立していなかった1990年代初期から、溶液化学の知識と精密な化学実験の技術を応用し、海水中の全炭酸濃度をそれまでより1桁以上の高精度で船上測定できる装置の開発に成功しました。この装置は、気象庁の現業観測による北西太平洋の広域リピート観測や、海洋研究開発機構の海洋地球研究船「みらい」による精密海洋観測など、多くの機関の海洋観測にも活用されています。また、南大洋季節海氷域、本州南方の亜熱帯域、太平洋赤道域の各海域にて、CO₂分圧と全炭酸の季節変化や年々変化を解明し、その変化に対する海洋物理的・生物地球化学的メカニズムを解明しました。これらの成果を活用して、太平洋の大気・海洋間CO₂交換の時間・海域変動を推定するアルゴリズムを改良し、エルニーニョに伴う変動などを評価しました。

さらに石井会員は、海洋の表層と内部における高精度炭酸系観測を推進し、長期に収集された観測データを利用して人為起源CO₂の海洋吸収・蓄積の研究に取り組みました。特に、自然変動と人為的要因による変化を識別する方法を提唱し、これにより北太平洋亜熱帯域や赤道域を対象に人為起源CO₂の海洋蓄積量をより正確に評価できることを示しました。また、IOCCP(GOOS生物地球化学パネル)共同議長やGO-SHIP科学運営委員として、国際的な海洋生物地球化学観測ネットワークの発展とデータの統合解析の国際共同研究に貢献し、地球規模の海洋炭素循環と酸性化の理解向上に努めました。これらが高い国際的評価を受けたほか、IPCC WG1 第6

次評価報告書主執筆者としても、この分野の研究成果の普及・啓発に大きく貢献しました。

石井会員は、精密な観測研究を長期にわたって推進するとともに、国際的な海洋観測ネットワークの構築と統合解析研究を主導し、地球規模の海洋炭酸系研究分野の発展に大きく貢献してきました。一連の成果が高く評価され、今回の受賞に至ったものと思います。今回の受賞が、今後のさらなるご活躍につながることを期待します。



受賞された、左から渡部 雅浩会員、安田 一郎会員、石井 雅男会員

寄稿③

安田 一郎会員が 文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞

日本海洋学会 会長 江淵 直人



この度、東京大学大気海洋研究所の安田 一郎会員が令和6年度の文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞され、4月17日に授賞式が行われました。受賞対象となった業績は「太平洋の海水混合と生態系や気候の長周期変動に関する研究」です。

太平洋では、数十年規模の海洋気候変動ならびにマイワシとカタクチイワシの漁獲量が交代する「魚種交代現象」が起きていることが1990年代に明らかになりました。しかし、この海洋気候の長期変動のメカニズムや水産資源変動との関係は未解明でした。

安田会員は「海洋鉛直混合およびその18.6年周期変動が海洋中層循環を通じて海洋・気候・海洋生態系変動に影響する」という仮説をもとに、千島列島海峡部、オホーツク海やベーリング海西部海域で6回に及ぶロシアとの共同観測航海を実施したほか、北太平洋の広範囲で現場観測を行い、千島列島やアリューシャン列島海峡部等で、潮汐に伴う海洋鉛直混合が外洋に比べて数桁大きいことを示しました。また、この大きな潮汐混合が月の地球に対



する公転軌道の18.6年周期に合わせて変化し、水塊や水温の変動を通じて物質循環や気候の変動にも影響を及ぼすことを、観測や気候モデル実験から示しました。加えて、魚種交代との関係が示唆されている、太平洋十年規模振動(Pacific Decadal Oscillation; PDO)の時系列に、これまで知られていた18.6年周期と3倍の55.8年周期に加えて1.5倍の27.8年周期が存在し、これら3周期の符合変化が同期することが、PDOの長期の変動に影響する可能性を示しました。

さらに安田会員は、代表として率いた科研費新学術領域「海洋混合学の創設：物質循環・気候・生態系の維持と長周期変動の解明(2015-2019)」において、CTDフレームに取り付けた高速水温

計を用いた乱流エネルギー散逸率の測定方法を開発しました。この鉛直混合を簡便に観測できる手法を用いて、北太平洋全域の海面から海底に至る乱流鉛直混合強度分布を明らかにし、従来評価が観測に比べて過大であることを指摘しました。また、鉄や栄養塩等物質分布と組み合わせることで鉛直方向の物質輸送を定量化し、千島・アリューシャン海域での数桁大きな鉛直混合が鉄や栄養塩を中深層から輸送することにより、北太平洋亜寒帯海域での高い生物生産を

維持していることを示しました。

安田会員は以上のように、気候・海洋・水産資源の長期変動の理解と予測に道を拓いたほか、海洋混合を通じて物理・化学・生物・気候・水産分野を融合し、新しい研究分野を創り出してきました。今後の分野横断型海洋学の模範ともいえるこれらの特筆すべき成果がこの度の文部科学大臣表彰に繋がったことを喜ばしく思います。



寄稿 ④

渡部 雅浩会員が文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞

東京大学 大気海洋研究所 羽角 博康

この度、東京大学大気海洋研究所の渡部 雅浩会員が令和6年度の文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞され、4月17日に授賞式が行われました。受賞対象となった業績は「数値モデリングによる気候変動および温暖化のメカニズム研究」です。

気候科学の分野において、従来の多くの研究では、人為起源の温室効果気体増加を原因とする長期的温暖化と、より短期的な気候自然変動や気象現象は別々に扱われてきました。しかし、温暖化の進行に伴い、変化する気候における温暖化と自然変動の関係性解明や、温暖化から気象現象への影響の定量化など、両者を包括的に扱う研究の必要性が増しています。

渡部会員は、人為起源ではない気候変動や異常気象をもたらす気候システムの力学に関する研究を土台に、過去から将来の気候変化の物理的理解を深化させる一連の研究を実施してきました。特に、今世紀に入ってからの温暖化停滞現象の要因分析、20世紀後半以降の熱帯域の気候変化に対する人為起源エアロゾルの役割、温暖化の物理指標である気候感度の決定プロセスの解明など、気候の自然変動と人為的温暖化のメカニズムを包括的に明らかにすることで、気候科学の進展に貢献してきました。さらに渡部会員は、個別の異常気象に対して温暖化の影響を定量化する新しい手法であるイベン



ト・アトリビューション研究を日本で初めて展開し、過去15年ほどの間に発生した熱波や豪雨などの強さや頻度に人間活動の影響を見出しました。これらの研究成果は、渡部会員自身が開発してきた大気力学診断モデルや、開発を主導した全球気候モデルなどの数値モデル群を階層的に活用し、大規模アンサンブルや多様な数値実験を実施することで得ら

れたものであり、気候の数値モデリングという技術的側面に関しても特筆すべき成果を挙げてきました。

渡部会員は、研究成果がIPCC第6次評価報告書などに反映されて気候科学の進展に貢献するとどまらず、解説・アウトリーチ・書籍やメディアからの情報発信を通じて一般社会に対する啓蒙にも尽力し、そうした一連の功績が高く評価されて今回の受賞に至ったものと思います。今回の受賞が今後のさらなる活躍に繋がることが期待します。



寄稿 ⑤

植松 光夫会員 TOS フェローに選出

海洋研究開発機構 本多 牧生

2024年2月、植松 光夫会員(埼玉県環境科学国際センター総長、東京大学名誉教授。尊敬と親愛の念を込めて以下、植松さん)が米国のThe Oceanography Society (TOS)のFellowに選出されました。選出理由は「アジア起源エアロゾルの太平洋横断長距離輸送過程とその海洋生物地球化学への影響に関する先駆的で優れた研究成果、SOLASなど大気・海洋科学における国際的他会分野横断型研究計画でのリーダーシップ、『フューチャーアース』や『持続可能な開発のための国連海洋科学の10年』などの国際科学委員会委員としての計画立案や推進による貢献」です。米国ルイジアナ

州ニューオーリンズで開催されたAGU/TOS/ASLO Ocean Science Meeting 2024期間中に表彰式が行われました。受賞スピーチは以下のような内容でした。

「私は、1941年に設立された日本海洋学会の第16代会長を務めさせていただきました。この度、TOS Fellowに選出され、正直ホッとしています。これを機にTOSが諸外国の海洋学会との交流を深め、「One Planet, One Ocean」が世界的に発展することを心より願っております。今日に至るまで奇跡の連続でした。深く感謝するとともに、今後もさらなる奇跡に出会えることを楽しみにして

います。」

植松さんらしく、ユーモアにもあふれ、大変好評でありました。

植松さんのご活躍は今更言うまでもありませんが、例えば、現在、新しい海洋観測プラットフォームとして注目されている無人表層観測船(USV)をいち早く「無人海洋大気観測艇 かんちゃん(SCOOP)」として戦略的基礎研究推進事業研究計画(CREST)「海洋大気エアロゾル組成の変動と影響予測」(VMAP)(1998-2003)において、開発されていました。また SOLAS/JAPANとして実施された科研費特定領域研究「海洋大気エアロゾル組成の変動と影響予測」(通称 W-PASS)(2006-2010)では研究代表者を勤められ、現在「海洋の二酸化炭素吸収気候工学」(mCDR)として再びクローズアップされている「鉄散布肥沃化」の西部北太平洋実験 SEEDS にも関わっておられました。一方、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震に端を発した東京電力福島第一原子力発電所事故の海洋調査研究では、国内そして日米の研究組織・調査報告のとりまとめに尽力されました。これらの功績も評価され、国内では2016年に海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)を受賞、2020年には

JpGU フェローに選出されております。

日本海洋学会会長や東京大学大気海洋研究所の国際連携研究センター長も歴任された植松さんの周囲には、常に国内外から多くの人が集まってきました。これは、上記研究業績や役職もさることながら、そのチャーミングなお人柄によるところが大きいです。いつもポジティブ、楽観的、気取らない関西弁で、先輩後輩、そして敵味方にも隔たりなく語りかけ、気持ちよく協働できる雰囲気・体制を構築してください。「おもしろ研究せなアカン」。私はいつも“発破ををかけられた”ものです。

最近、ダイエットに成功され、スリムになられるとともに、長年隠されていた日本人離れしたバタくさい精悍な風貌が戻ってこられました。くれぐれもリバウンドされませぬよう節酒して適度な運動にお努めください。そして、これからも学会や研究集会、委員会の昼の部、そして夜の部に顔を出していただき、変わらぬご指導、ご鞭撻をよろしく願いいたします。

TOS Fellow 選出、誠にめでとございました。



祝賀朝食会にて(歴史時代小説家の奥様、仏自動車会社デザイナーのお嬢様、そして可愛いお孫さんと一緒に)

情報①

2023年度 若手武者修行セミナー 開催報告

東京大学 西川 はつみ / 理化学研究所 大石 俊 / 神戸大学 藤原 泰
海洋研究開発機構 深井 悠里

「若手武者修行セミナー」は、所属機関以外でのセミナー発表を希望する若手会員(主に博士課程の学生やポスドク)を募り、応募者

の希望する訪問先でのセミナー開催を仲介するプロジェクトです。本プロジェクトは、学会発表や所属機関内での活動とは違う形で学



武者修行セミナーで発表する(許さん)

外・専門外の研究者と意見を交換する機会を創り、他機関との人材交流を促進することを目的として2014年度より活動が始まりました。2023年度は日本海洋学会若手集会助成を受け2件の武者修行セミナーを実施することができましたので、以下に報告致します。

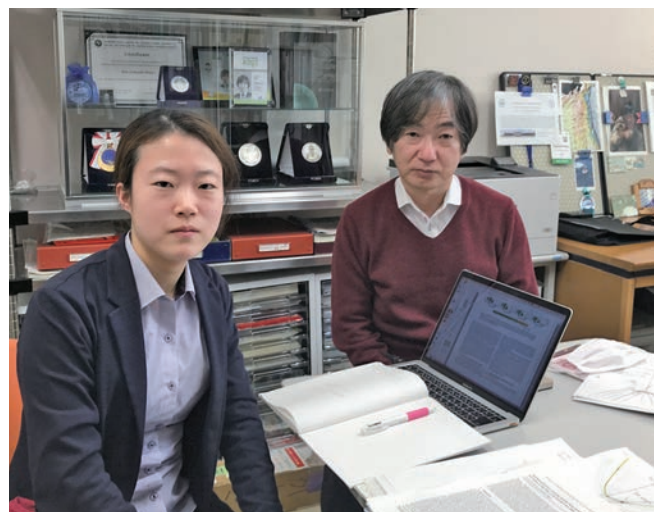
東京大学大気海洋研究所博士課程の許 浩東さんは、九州大学応用力学研究所の磯辺 篤彦教授の研究室を訪問し、『北太平洋におけるマイクロプラスチック分布と輸送の長期変動と未来予測』についてセミナー発表を行い、貴重かつ有益な意見をいただいたとのこと。加えて、訪問先の博士研究員や博士学生が取り組んでいるマイクロプラスチックについての研究発表を聴講し、「我々が行っているマイクロプラスチック研究は環境汚染を評価することだけでなく、カーボンニュートラルの経済社会を作ることにも知識を提供していると感じました。私も早く論文を投稿し、世界中のマイクロプラスチック研究に貢献したいと思いました。」との報告をいただきました。

九州大学応用力学研究所博士課程の酒井 秋絵さんは、東京海洋大学の日比谷 紀之客員教授を受入れ研究先として、博士論文の研究テーマである『日本海南東部で観測される内部重力波』について研究成果を報告するとともに、解析結果の解釈について個別ディスカッションを行いました。到着直後から帰路に就く直前まで濃密に議論が行われ、観測結果についてこれまでとは違う解釈ができ、新たな知見が得られ、非常に有意義な訪問となったようです。今年度および過去のセミナー実施者からの報告の詳細は武者修行セミナーHP(<https://sites.google.com/view/jos-wakate-musha/>)でご覧になれます。

武者修行セミナーが発足して今年で10年目となりました。これまでに大学院生21名(修士課程3名、博士課程18名)、ポスドク5名の計26名の若手会員が武者修行セミナーを実施しました。いずれのセミナー参加者も、じっくりと時間をかけた研究発表と議論を通して将来の研究の展開に繋がる有益な経験が得られたとの感想を述べています。また、受入れ機関からは「若手の研究内容を深く

知ることができ、有益である」等の感想をいただき、本セミナーが目指す人材育成・交流に貢献する成果となっています。受入れ研究者だけでなく訪問先の他の研究者や学生との情報共有を通じた交流を深めることも、本セミナーの醍醐味の一つだと考えております。さらに、普段交流の機会の少ない、自身の研究分野とは少し異なる研究室への訪問も、分野横断研究に繋がるのではと期待しています。ぜひ若手会員の方々には本セミナーを活用いただき、人脈はもちろん研究の視野を広げていただければと思います。また、より魅力的な若手集会の開催を目指し、本セミナーの目的や開催形式についても検討していきたいと考えておりますので、ご要望やご意見などもいただければ幸いです。セミナーにご興味をお持ちの方は運営委員(jos_wakate_seminar@googlegroups.com)まで、どうぞお気軽にご連絡ください。

最後に、武者修行セミナーをご支援いただいている日本海洋学会若手集会助成に厚く御礼申し上げます。そして、若手研究者を快く受け入れてくださった各研究機関・研究者の方々にも、心より御礼を申し上げます。



セミナー後の写真(酒井さん(左))

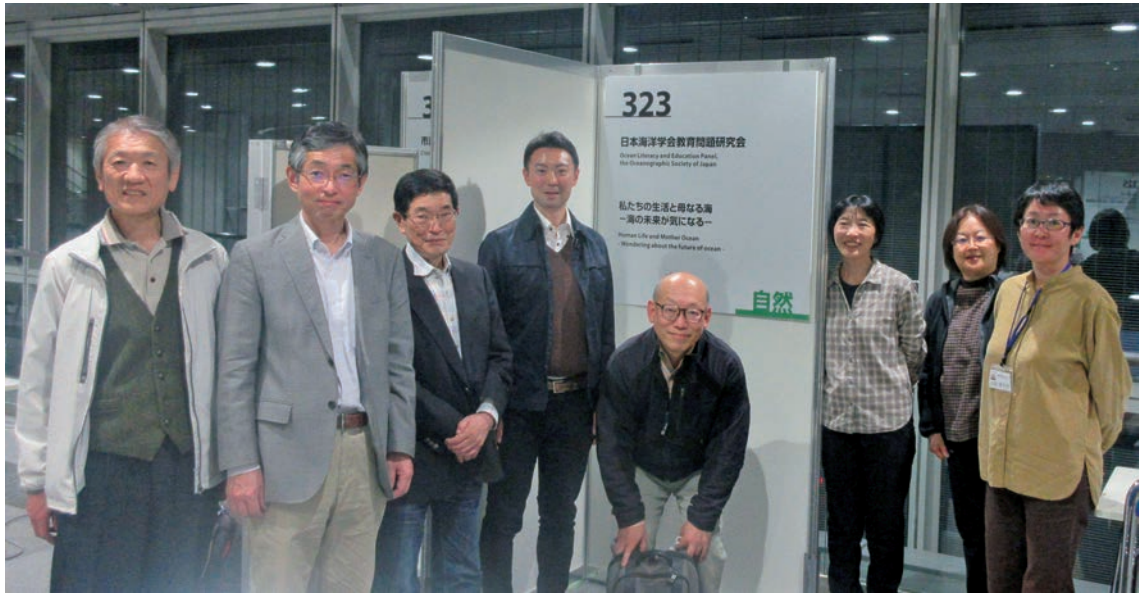


情報② サイエンスアゴラ2023 ブース企画

「私たちの生活と母なる海—海の未来が気になる—」出展報告

教育問題研究会 轡田 邦夫¹・池田 元美・池上 隆仁²・市川 洋・伊藤 進一³・今宮 則子⁴
上野 洋路⁵・大林 由美子⁶・柏野 祐二⁷・川合 美千代⁸・越田 勇氣³
須賀 利雄⁹・野村 英明³・藤井 直紀¹⁰・安中 さやか⁹・渡部 裕美²

¹東海大学 ²海洋研究開発機構 ³東京大学 ⁴海の自然史研究所 ⁵北海道大学 ⁶愛媛大学
⁷水産大学校 ⁸東京海洋大学 ⁹東北大学 ¹⁰日本気象協会



ブース前でのメンバーの皆さん

1. はじめに

国立研究開発法人 科学技術振興機構(JST)が主催するサイエンスアゴラは、科学と社会の関係をより深めることを目指し、市民参加型のオープンフォーラムとして2006年からお台場地区で開催されてきた(アゴラ agora は古代ギリシャ語で広場の意味)。教育問題研究会では2014年度から継続的に出展しており、オンライン企画でのライブ配信型出展となった2020-21年度を除いて、ブース型もしくはセッション型出展で参加してきた(市川、2015、2016、2017; 轡田・市川、2020; 轡田他、2021; 轡田他、2022)。2023年度も11月17-18日にブース型で出展参加してきた。

サイエンスアゴラ事務局から公開された開催報告書(<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/2023/common/pdf/report2023.pdf>)によれば、出展プログラム数は137(142)企画(括弧内は2022年、以下同様)、その内訳はオンライン開催(2023年10月26-28日)が23(28)企画、実地開催が114(114)企画、全参加者数は8,806(6,841)名で、その内訳は実地来場者3,525(1,870)名、ライブ配信参加者2,521(3,168)名、YouTube視聴者2,760(1,803)名とのことだった。また実地開催(2023年11月18-19日)の事前登録者3,219(1,298)名の90(87)%は関東地方からの参加者とのことで、年代別および所属機関別の属性が図1、図2に示され

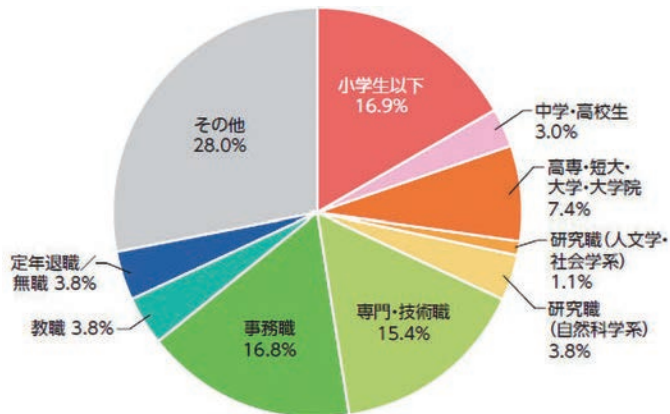


図1

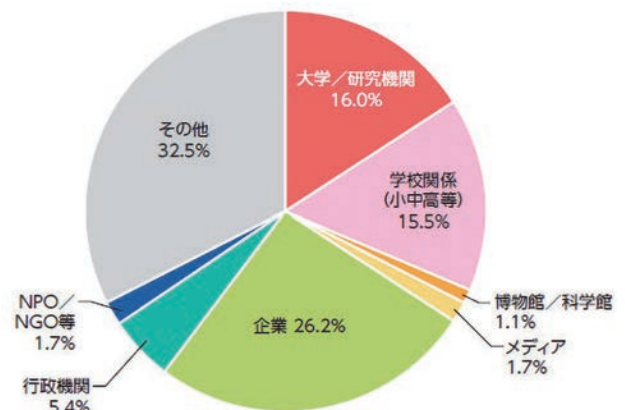


図2

る。2022年に比べて企画数は同程度であったが、全参加者数は30%近く、実地来場者数は2倍近く増加し、特に小学生以下の参加者数の増加がその比率(前年は4.1%)も含めて顕著であったと言える。

2. 実施内容

前年(サイエンスアゴラ 2022)と同様に以下の3つのテーマを対象にしたブース出展を行った。それぞれの詳細については、轡田他(2023)を参考にされたい。

【海の中の構造の再現実験】

小型の水槽中の水を電熱線で加熱して成層状態を再現、温度によって変色するサーモインクで可視化し、冷却した際に発生する鉛直混合の様子を理解させる。

【スマホ顕微鏡によるプランクトンの観察】

出展当日に会場付近の海で採取したプランクトンをスマホ顕微鏡による観察を通して海の生態系での食物連鎖と関連付けて理解させる。

【海岸の砂中のプラスチック片の観察】

東京湾の砂浜(千葉市・豊砂の浜と横浜市・野島公園乙舩海岸)で採取された砂に含まれるプラスチック片等を抽出・観察することによって、海洋プラスチック汚染の実態を理解させる。

各テーマに対して、常時2-3名のスタッフが常駐し時間交代制で来場者へ対応したが、小学生低学年以下の来場者が多いことが印象的であった。

以下に担当したスタッフからの声を紹介する。

- 身近でも目にするもので海洋科学を説明するのと、研究者でないで持っている(できない)モノを見せるというのが同時にできていたので、一般の参加者にはとてもインパクトのあるブースになっていたと思います。
- 来場者が「へえ」と言ってくれるのがうれしかったです。次回は、プランクトンが果たす役割(海の食物網や炭素吸収や酸素供給など)を紹介するチラシを作っておくとよいのではないかと思います。
- 2023は、ブースを広く確保したのがとても良かったと思います。
- 背面のパーティション(ポスターなどを掲示する)は数を増やして、海や体験内容を強調できる貼りものを増やすと良いかなと思いました。
- 今回、大学院生の方がスタッフとして参加してくれました。来場される方の年齢や背景知識にあわせて説明されている様子に感動しました。
- プラスチックごみの削減に対する国際的な機運の高まりもあってか、来場者の多くから質問があり、海洋プラスチック汚染に対してある程度の知識を持っていることが伺えました。親御さんが質問して得た知識をその場でお子さんに伝えようとする姿が見受けられ、私自身も伝え方の勉強になりました。プランクトン観察も大変人気があり、多くの方が純粋に観察を楽しんで下さいましたが、本来伝えたかった「プランクトンが海洋生態系や物質循環に果たす役割」にまで話題が発展することは稀で



会場風景：海の構造の再現実験(手前)とプランクトン観察(奥)



会場風景：海岸の砂の観察(手前)とプランクトン観察(奥)

あり、私達の導入説明や補助資料の見せ方に工夫が必要であると感じました。

以下は、サイエンスアゴラ報告書から抜粋した参加者の声である。

- 各々が自分達の研究や発表、発見に自信とやる気や責任があり、喜々として語ってくれたことが印象に残っている。
- 科学を体験できるよい機会なので引き続き開催してほしい。
- 市民と科学者、子ども(親世代)と科学者の良い接触の場だと感じた。来年も来たい。
- 学会を一般向けにしたらこうなる！という理想形を見られた気がします。どの展示も専門外にとってわかりやすく、ためになりました。
- 全国から人々が集まって科学のブースを出しているのがおもしろいです。研究所から市民団体まで、色々あるのが最高によい。
- 今の社会の問題などを多く取り上げていて、少しでも未来の社会が暮らしやすいものになるのではないかと思います。
- 全く知らなかった分野を、プロに説明してもらえるのがとてもおもしろく、うれしいです。
- 環境問題など、とても印象に残り、自分も意識を高めなくてはと思います。
- 中学生や高校生が一般の人を相手に発表、説明している様子が立派でよかった。
- 科学的なことだけでなく様々な角度からの出展がありおもしろ

かった。

- 小学生にもゲームや体験型が多く、楽しめました。大人は現在行われている開発が知れて興味深かったです。
- どのブースでも興味をそそられる展示をしていて、内容もおもしろかった。「なんで？すごい！」って素直に楽しめる。
- 興味があることでもなかなか身近で体験や観察することが難しいので、この場を作って頂いて非常に感謝しています。
- ネットや本を見て、一見とつきにくい分野も、実物を見ることができ、興味がわきました。
- 次回参加する際には、科学や生命科学についてさらに学んで、色々な人と話したいと思いました。

これら参加者の声からは、如何に専門的な知識を分かり易く伝えていくかが重要であり、サイエンスアゴラへの出展は我々研究会の活動の一翼を担う点での意義が大きいと感じられた。

3. おわりに

2014年度から継続出展してきた本イベントへの参加は通算10年に達し、教育問題研究会の定例行事となりつつある。2024年度は10月26-27日にお台場地区で実施(現地開催のみ)されることが発表された。近々に開始されるその出展募集に向けた対応が必要と言え、研究会以外の海洋学会員の方々からの協力や貢献を期待したい。

参 考

- 市川 洋 (2015) : サイエンスアゴラ 2014 出展報告、JOS News Letter、4 巻 4 号、8-10.
- 市川 洋 (2016) : サイエンスアゴラ 2015 出展報告、JOS News Letter、5 巻 4 号、9-10.
- 市川 洋 (2017) : サイエンスアゴラ 2016 出展報告、JOS News Letter、7 巻 1 号、8-9.
- 轡田 邦夫・市川 洋 (2020): サイエンスアゴラ 2019 出展報告、JOS News Letter、10 巻 1 号、6-8.
- 轡田 邦夫・市川 洋・渡部 裕美・須賀 利雄 (2021): サイエンスアゴラ 2020 出展報告、JOS News Letter、10 巻 4 号、13-14.
- 轡田 邦夫・市川 洋・渡部 裕美・須賀 利雄・柏野 祐二・藤井 直紀・安中 さやか・道田 豊・大林 由美子・今宮 則子(2022): サイエンスアゴラ 2021 出展報告、JOS News Letter、12 巻 1 号、11-13.
- 轡田 邦夫・市川 洋・伊藤 進一・今宮 則子・大林 由美子・柏野 祐二・川合 美千代・須賀 利雄・藤井 直紀・道田 豊・安中 さやか・渡部 裕美 (2023): サイエンスアゴラ 2022 出展報告、JOS News Letter、13 巻 1 号、3-6.
- サイエンスアゴラ事務局 (2023): サイエンスアゴラ 2023 開催報告書、国立研究開発法人 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター、28 P.
<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/2023/common/pdf/report2023.pdf>



情報 ③ 2023年度後期 日本海洋学会海外渡航援助 報告書

「Ocean Science Meeting 2024」参加報告-1

AHMED Sk Istiaque, Graduate Student (D3), Department of Aquatic Bio-science, The University of Tokyo

I recently had the incredible opportunity to share my research findings at the esteemed Ocean Science Meeting (2024) held in New Orleans, USA. With the financial support of the Oceanographic Society of Japan (JOS), I embarked on a journey to present my study on fish species eDNA detection. This experience was not only enriching but also pivotal for my academic and professional growth.

My journey to New Orleans revolved around presenting my research titled “*Comparison of Three Surface Sampling Methods for Fish Species eDNA Detection Using MiFish Primer.*” The primary aim was to engage with experts in the field, exchange ideas, and learn from researchers worldwide.

Interacting with knowledgeable scholars allowed me to engage in meaningful discussions about my research topic and receive valuable criticism. My study aimed to compare three surface sampling methods, demonstrating the feasibility of using ship-bottom intake samples at a more global scale by comparing them with conventional Niskin and bucket samples. Our results broadly support the idea of using ship-bottom intake samples for high-resolution eDNA observation, except for several species. This comparison sheds light on the potential of ship-bottom intake

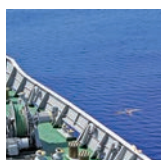
samples for advancing eDNA research on a global scale.

I am grateful for the appreciation I received from the audience and esteemed professors for my enthusiastic research presentation. Valuable suggestions were offered on addressing research gaps in my current project. Additionally, working in a multicultural environment where scientists from around the world collaborate has further enriched my research experience. I had the wonderful opportunity to serve as a moderator, representing student members, for the session ME43A: Marine Ecosystems Across Scales of Space, Time, and Biology V Oral. I was thoroughly impressed by several presentations, but I found the ME session especially enjoyable, as it aligns closely with my interests. Participating in the Ocean Science Meeting in New Orleans was a significant milestone in my academic journey. By presenting my research and engaging with experts in the field, I not only expanded my knowledge but also gained valuable insights that will undoubtedly shape my future research endeavors.

I extend my heartfelt gratitude to the Oceanographic Society of Japan (JOS) for their support in covering my travel expenses. I also want to thank my research supervisor, Professor Shin-ichi Ito, for generously providing the remaining required funds for the trip.



Standing before the main back-wall banner at the Ocean Science Meeting 2024.



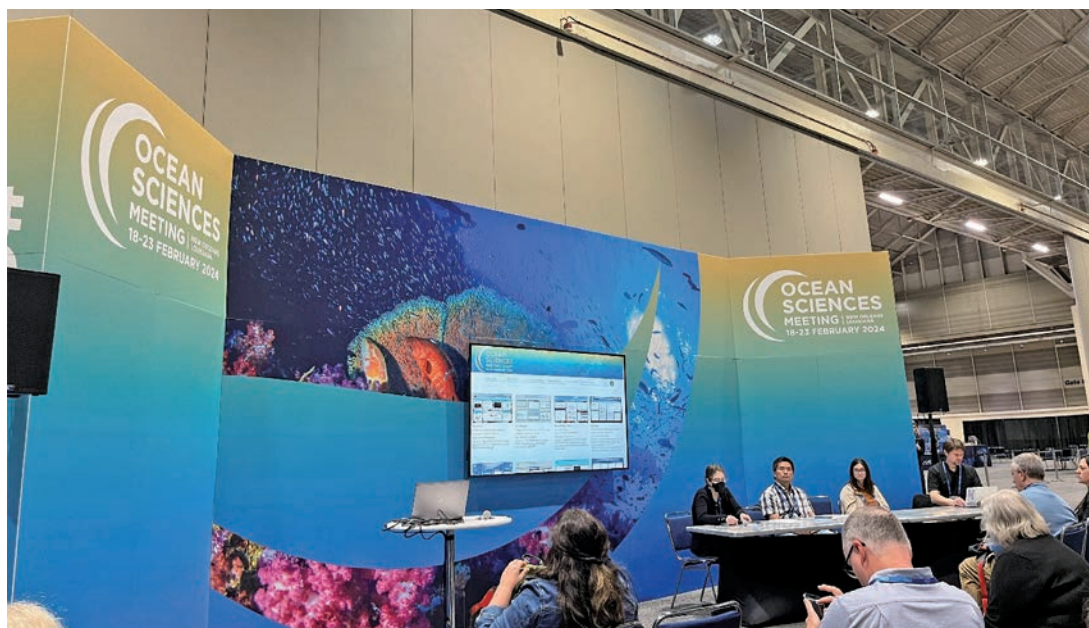
情報④ 2023年度後期 日本海洋学会若手海外渡航援助 報告書

「Ocean Sciences Meeting 2024」参加報告-2

北海道大学大学院 環境科学院地球圏科学専攻 本田 茉莉子

日本海洋学会より若手海外渡航援助をいただき、2024年2月20-23日までの期間、アメリカニューオーリンズにて開催された Ocean Sciences Meeting 2024 (OSM2024) に参加しました。初めての海外での国際学会参加で、大きな会場と多くの参加者に圧倒されました。私は、セッション“Arctic Ocean Changes and Processes”において、オホーツク海での海洋観測データに基づく海水融解量の推定と空間分布・経年変動についての発表“Interannual

variability of sea ice melt estimated from spring hydrographic data in the Sea of Okhotsk”を行いました。発表形式は従来の口頭やポスターによる発表ではなく、オンライン上の電子ポスターとタッチスクリーンモニターを用いた eLightning と呼ばれる形式で、セッション冒頭で発表者一人当たり3分間の概要説明を行い、その後個別に与えられたモニターの前で質疑応答が行われます。私は自身の英語でのコミュニケーション能力が不十分だと感じていたため、



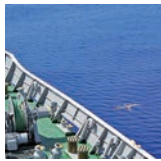
OSM2024 の eLightning 発表会場

3分間の概要説明とモニター前での議論の両方に自信が持てず大変緊張していましたが、想像していたよりも多くの研究者や学生の方に興味を持っていただき非常に有意義な時間となりました。気づけば、セッション終了時間を超えて質問に答えていました。質問の内容に関しては、冬季混合層を用いる本研究の手法に関する質問と、過去約30年間の海水変動による南部オホーツク海への淡水輸送の弱化に対する質問が目立った印象です。一方で、やはり英語による説明が難しく、伝えたいことを伝えきれないもどかしさも感じました。今回のOSM2024にて発表を行ったことで、今後も国際的な研究発表に挑戦していくモチベーションがさらに強くなりました。

自身の発表以外の時間は、主に北極域の海洋環境に関するセッションの口頭発表を聴きに行きました。どの講演も限られた時間の

中で最先端の研究成果や重要な情報が詰まっており、刺激的で勉強になりました。同世代の興味深い内容の発表も少なくなく、今後の研究への意欲が触発されたように感じます。巨大なポスター会場には約2,700枚が掲示されており、海洋科学という点でのみ共通した、様々な分野・手法・海域における研究が並んでいたため、偶然見かけたポスターの内容に惹かれて時間を忘れて立ち止まって読んでしまうことが多々ありました。

最後に、OSM2024にて初めての海外学会発表という貴重な経験を得ることができ、様々な場面で学びが多く、大変有意義な渡航となりました。この経験を今後の研究に生かしていきたいと存じます。ご支援いただいた日本海洋学会の皆様へ心より感謝申し上げます。



情報⑤ 2023年度後期 日本海洋学会若手海外渡航援助 報告書

「Ocean Sciences Meeting 2024」参加報告-3

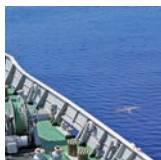
海洋研究開発機構 ポストドクトラル研究員 深井 悠里

今回私は、日本海洋学会より海外渡航の援助を頂き、米国・ニューオーリンズで2024年2月18-23日に開催された国際学会「Ocean Sciences Meeting 2024」へ参加いたしました。本年の学会では、約6,000人ものが研究者がニューオーリンズへ集い、研究発表や議論を行いました。また、研究発表のみならず、様々な海洋コミュニティに関わるワークショップやタウンホールミーティングが開催され、改めて海洋研究における国際ネットワークの重要性を強く感じました。Ocean Sciences Meetingは海洋研究に関わる最大規模の国際会議のひとつであり、1982年から続く歴史の深い会議ということですが、博士後期課程の期間をコロナ禍で過ごし、対面での国際学会の経験が少ない私にとっては、会場の広さから研究セッションの数・多様性に至るまで、圧倒される経験となりました。

本学会において私は、「Arctic Ocean Changes and Processes」というセッションにおいて「Autumn diatom dynamics in the Pacific Arctic shelf」というタイトルで口頭発表を行いました。私が研究対象とする北極海では、近年、秋季の結氷時期の遅れにより海水の無い開放水面域における強風イベントが増加し、それに伴って秋季にも微細藻類の大増殖が発生しやすくなったことが報告されていま

す。しかしながら一方で、そのような秋季の強風イベント期間において、主要な基礎生産者である珪藻類がどのような群集動態を示すのかは不明でした。そのような背景の下、2020年の秋季に行われたJAMSTEC「みらい」の北極航海で得られた珪藻類の群集データと海洋環境データを解析したところ、強風イベントが起こると堆積物中の珪藻類が海洋表層まで供給されることが明らかとなりました。Ocean Sciences Meeting 2024では、堆積物中の珪藻類が秋季の基礎生産者として関わっている可能性も含め、発表を行いました。私の参加したセッションでは、「北極海」というキーワードを基にして、生物分野だけではなく、物理・化学を専門とする発表が多く集まっており、北極海の物質循環を様々な視点から知る良い機会になりました。また、生物分野の発表からは、世界の解析のトレンドを知り、自身の解析をより発展すべき方向性を再確認する機会となりました。

最後になりましたが、Ocean Sciences Meeting 2024への参加に際して「日本海洋学会若手海外渡航援助」のご支援を頂きましたこと、深く御礼申し上げます。本国際学会への参加から得られた経験を活かし、今後の研究を更に発展させていけるよう取り組んで参ります。



情報⑥ 日本海洋学会 若手海外渡航援助 報告書

「Ocean Sciences Meeting 2024」参加報告-4

東京大学 大学院 博士課程1年 林 沅

日本海洋学会の若手海外派遣支援を受け、2024年2月18-24日までアメリカニューオーリンズで開催されたアメリカ地球物理学連合(AGU)主催の2024年海洋科学大会(Ocean Science Meeting 2024)に参加する機会を得ました。この大会で、私は「Marine Ecosystems Across Scales of Space, Time, and Biology VII Oral」セッションで、「eDNA analysis reveals spatiotemporal distribution

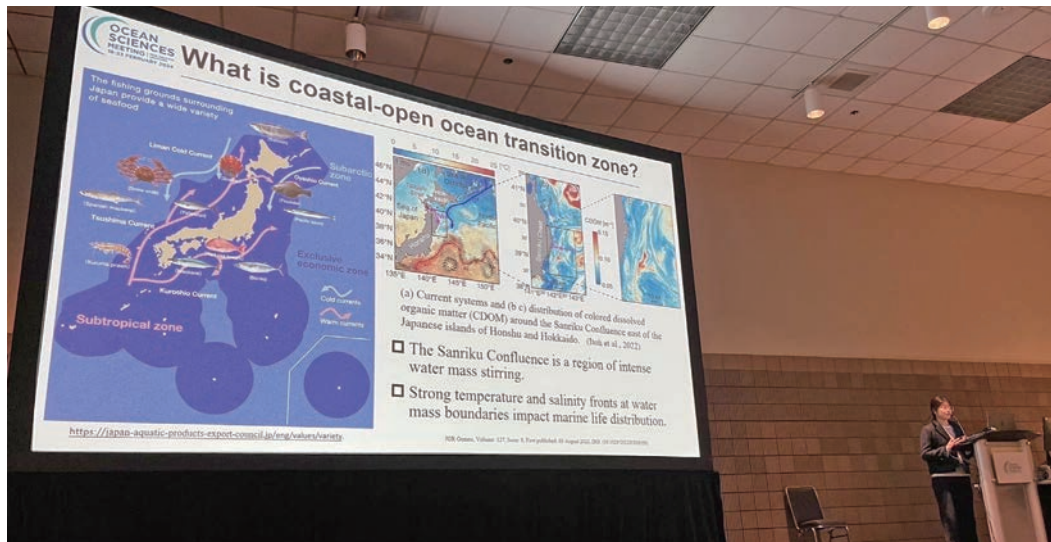
of fish communities in the coastal-open ocean transition zone」に関する口頭発表を行い、eDNAを用いた日本周辺の太平洋北部、三陸沿岸から沖合に至る魚類分布に関する最新の成果を発表しました。発表後の質疑応答では、アメリカを含む世界各地の研究者からのフィードバックを聞き、会期中に同じ分野の研究者と幅広く研究成果を交流しました。

また、学生およびキャリア初期の研究者を対象にしたワークショップにも積極的に参加しました。このセッションでは、研究計画書の効果的な作成方法、科学セッションの提案方法、研究プロジェクトの管理方法、そして研究者間でのより良い連携の築き方について学びました。これらの学びは、実用的なツールや方法を提供するだけでなく、科学研究者としての専門能力を大いに高めるものでした。

これは私が日本国外で初めて参加した国際学会であり、世界中の海洋科学者との深い交流と学びの貴重な機会を提供してくれまし

た。参加者との相互作用を通じて、海洋生態系の複雑さに対する理解を深めることができただけでなく、多くの研究協力の機会と学術的なアドバイスも得られました。また、会議での口頭発表は、研究成果と科学的発見を示すステージを提供し、私の学術的表現能力と自信を大幅に向上させました。この貴重な経験は、私の個人的および専門的な発展に深い影響を与え、未来の学術キャリアのための強固な基盤を築くことになると確信しています。

日本海洋学会の若手海外渡航支援に改めて感謝します。この機会を借りて、日本海洋学会の皆様へ心からの感謝を表します。



会場で口頭発表を行う筆者



情報 ⑦ 日本海洋学会 若手海外渡航援助 報告書

「Ocean Sciences Meeting 2024」参加報告-5

新潟大学 自然科学研究科 修士2年 清水 幸大

この度、日本海洋学会若手海外渡航援助に採択していただき、助成金を旅費等に当てることで無事に国際会議への参加ができました。深く感謝を申し上げます。

今回の国際会議では「North-south longitudinal distributions of suspended particulate trace elements in the western North Pacific」というタイトルでポスター発表を行いました。発表内容は本研究のメインとなる西部北太平洋の東経 155 度線における懸濁粒子態微量元素 (Al, P, Ti, Mn, Fe, Co, Cu, Zn, Cd, Pb) の南北鉛直断面分布について、その特徴を示しました。また地殻起源粒子の指標となる Ti/Al 比および Fe/Al 比の鉛直断面分布を示し、Fe については非陸源粒子を算出するアプローチを含め議論することで、南北間のエアロゾル等による陸源粒子の影響の差や生物による取り込みの影響との差について示しました。また主に生物サイクルによって支配されている Cd および P の関係プロットは全ての測点で正の相関が観られ、特に富栄養海域である亜寒帯域においては溶存態 Cd : P の関係の比よりも高い値がみられることを示しました。これは植物プランクトンによる Cd の偏重的な取り込みであり、鉄制限下における特徴と一致することを示しました。また Mn と Co の鉛直分布の類似性から、有光層以深では全海域においてマンガン酸化物の形成による Co の共酸化によって強い相関がみられることを示しました。

有光層以浅では亜寒帯域以外の海域において、Mn は光還元により溶存化する一方で Co は生物に取り込まれ粒子化することで相関は弱くなることを示し、亜寒帯域では日射量の少なさから光還元が起きづらく溶存化しないため相関は強くなることを示しました。さらに Co と P の関係において、貧栄養海域の熱帯・亜熱帯域においては強い相関がみられ、富栄養海域の亜寒帯域においては相関がみられることを示しました。これは他の微量必須栄養素とは逆の相関であり、この要因は貧栄養海域においてより支配的となる藍藻類が Co を優先的に取り込むため、このような相関となることを示しました。

初めての国際会議ということで緊張もあり、つたない英語での発表でしたが私の発表には 6、7 人の方が聞きに来ていただきました。特に藍藻類による Co の取り込みについて参考文献として引用させていただいたご本人とも議論することができ、私にとって非常に喜ばしく、理解が深まる良い機会となりました。また他の参加者の発表を聞き議論した際には多くの学びがあり、特に同年代の方の発表からは強い刺激を受け自分ももっと様々なことができたのではないかと考えさせられる機会にもなりました。

改めて助成金の採択を受けることができ、このような貴重な体験ができたことに心より感謝申し上げます。



情報 ⑧

海洋中手会懇親会 @JpGU Meeting 2024

理化学研究所 大石 俊 / 水産研究・教育機構 田中 雄大 / JAMSTEC 西川 はつみ
神戸大学 藤原 泰 / 水産研究・教育機構 伊藤 大樹

海洋中手会は20-30代の研究者が中心となり、主に、武者修行セミナーの運営、海洋学会秋季大会でのナイトセッションの企画、懇親会の企画などを行い、学生から若手研究者をサポートする活動を継続しています。JpGU Meeting 2024 期間中の5月27日19時から海洋中手会懇親会を行い、合計21名(若手研究者15名、民間企業職員1名、博士課程の学生5名;男性14名、女性7名;初参加5名)が参加しました。研究、科研費、就職活動、博士取得、乗船など多岐にわたる話題で互いの親睦を深めました。

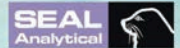
このような懇親会は、分野や世代の垣根を超えた人脈の構築に繋がり、学生や若手研究者が学会に参加するモチベーションの一つになっていると感じています。次回の秋季海洋学会を含めナイトセッションおよび懇親会を継続して開催する予定ですので、学生・若手研究者の積極的な参加をお待ちしております。最後に、日本海洋学会からの学生・若手研究者への手厚いご支援に感謝申し上げます。



海浜幕張駅近くで開かれた懇親会風景



高精度栄養塩類自動測定装置



QuAAtro39-J

従来モデルQuAAtro39のポンプを改良・光学モジュールの固定によりラボはもちろん、船上においても安定した高精度測定が可能になりました



新型オートサンプラーAIM4000との組み合わせで更なる高精度測定を実現
◎防護ケース標準装備 ◎窒素ページ対応 ◎試験管最大240本搭載可



繰り返し精度*条件による
硝酸+亜硝酸:0.15% 亜硝酸:1.0%
ケイ素:0.15% リン酸:0.15% アンモニア:1.0%



ビーエルテック株式会社

本社:大阪府大阪市西区江戸堀1-25-7 江戸堀ヤタニビル2F
TEL:06-6445-2332

東京本社:東京都中央区日本橋大伝馬町14-15 マツモトビル4F
TEL:03-5847-0252

九州支社:福岡県福岡市博多区博多駅東3-1-29 博多第2ムカキビル4F
TEL:092-452-0108



日本海洋学会の活動は国内外の多くの組織・プログラムと密接に関わっており、会員間での関連情報の共有と、会員による様々な国際プログラムへの積極的な関与は極めて重要です。日本海洋学会に関係する学界情報については年に2回取りまとめ、総会ならびに評議員会で報告すると共に、JOS ニュースレターに掲載することにしております。以下の情報は、関係の会員の皆様から2024年3月下旬までにお寄せいただいたものです。ご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

1. 日本学術会議

第26期がスタートした。学術振興のグランドビジョンを示す「未来の学術振興構想(2023)」が提言として発出された。科学者コミュニティの自由な発想によるボトムアップを重視した研究戦略として、19の個別ビジョンが提案されている。各ビジョンは10前後の分野ごとの観点による中長期戦略を取りまとめたもので、海洋学会が深く関連する「深海アルゴフロートの全球展開による気候・生態系変動予測の高度化」は他の11の地球環境・地球惑星系分野の戦略と一緒に「観測技術革新による地球システムの理解と地球変動予測への展開」として統合されている。(原田 尚美)

2. UNESCO/IOC (Intergovernmental Oceanographic Commission; 国連教育科学文化機関(ユネスコ)政府間海洋学委員会)

2024年1月22-24日、パリのユネスコ本部においてIOC役員会が開催された。議長の道田のほか、副議長5名、リャビニン事務局長以下事務局幹部が出席。加えて、次期事務局長に決定していたヴィダー・ヘルゲセン氏と、日本から議長サポートとして海洋研究開発機構の飯島 瑞枝がそれぞれオブザーバとして出席した。第32回総会における決定事項の実施状況の確認と6月に予定されている第57回執行理事会の準備が主要議題であった。4月にバルセロナで開催される国連海洋科学の10年科学カンファレンスの準備についても議論された。なお、上記ヘルゲセン氏は予定通り3月1日に事務局長に就任した。(道田 豊)

3. DCC-OP-WPMSEA (UNDOS Decade Collaborative Center Ocean Prediction (DCC-OP), West Pacific and Marginal Seas of South and East Asia (WPMSEA) Regional Team)

The Ocean Prediction Decade Collaborative Center (DCC-OP)は、メルカトル・オーシャン・インターナショナル(フランス)によって主催された海洋予測に関する国際共同研究を促進することを目的とした国連海洋科学の10年共同センターの1つである。世界の海域によって構成されたRegional Teamが存在し、日本はWest Pacific and Marginal Seas of South and East Asia (WPMSEA)に属する。WPMSEAの主催機関はJAMSTECである。今後の活動予定は、

4月8日(現地時間15:00-19:00)にスペイン・バルセロナにて「Connecting the world around ocean prediction: A vision for the Decade and beyond」というUN Ocean Decade Conferenceのサテライトイベントを開催する。また、4月24日(現地時間13:00-17:00)にタイ・バンコクにてWPMSEAのワークショップをthe 2nd UN Ocean Decade Regional Conference & the 11th WESTPAC International Marine Science Conferenceの中で開催する。

(林田 博士)

4. UNDOS program CSK-2 (The 2nd Cooperative Study of the Kuroshio and its Adjacent Region)

ユネスコ政府間海洋学委員会西太平洋小委員会(IOC/WESTPAC)の国際黒潮観測プロジェクトであるCSK-2は、「国連海洋科学の10年」のプログラム(UN-24)として、黒潮とその天気や気候への影響および海洋生態系との関係に関する知見を得ることで社会に貢献すべく、2023年2月21日の第3回国際運営グループ会合で承認された11課題で活動を開始した。2023年12月4-6日、中国青島にて第4回運営会議が開催され、各課題の進捗状況が報告された。加えて、第2回の課題募集に応募された3つの提案についての審議の結果、2課題が承認された。会議では、今後のプロジェクトの運営やアウトリーチについての話し合いがなされた。次回の新課題の募集については学会メーリングリスト等で周知する予定である。(永野 憲)

5. UNDOS program Challenger 150

SCOR WG#159がUN Decade Program “Challenger 150”に引き継がれ、2023年10月に活動を終了した。Challenger 150の活動内容についてはSNSの他、ウェブサイト(<https://challenger150.world/>)でも随時更新されており、深海生物群集の標準化したデータ取得・管理・解析に取り組んでいる。2024年4月のOcean Decade ConferenceにおいてOcean Stewardship Initiative (DOSI)とともにサイドイベントへの参加を予定している。またChallenger 150のregional working groupのうち太平洋に関わるグループが合同で2024年6月に東京大学大気海洋研究所にてワークショップを開催する予定である。(渡部 裕美)

6. SCOR (Scientific Committee on Oceanic Research; 海洋研究科学委員会)

SCOR2023年次総会は、10月16-19日にエクアドル共和国グアヤキル市において対面およびオンラインで開催され、参加者は27か国から98名であった。SCOR事務局長はPatricia Miloslavichが退任し、Emily Twiggが新任された。2023年新規申請のSCORワーキンググループ(WG)課題12件が審査され、下記の3件が採択された。Coordinating the Development of Gridded Four-

Dimensional Data Products from Biogeochemical-Argo Observations (4D-BGC); New physiological Metrics for Oceanography from 'Omics (NEMOO); および Global Library of Underwater Biological Sounds (GLUBS)である。日本からは、4D-BGCに藤木 徹一(海洋研究開発機構)がフルメンバー、NEMOOには鈴木 光次(北海道大学)がフルメンバー、横川 太一(海洋研究開発機構)がアソシエイトメンバーとして参画している。2024年次の総会は、SCOR中国の設立40周年記念に合わせて中国の青島で開催予定である。(張 勁)

7. IUGG (International Union of Geodesy and Geophysics; 国際測地学・地球物理学連合)

および

8. IAPSO (International Association for the Physical Sciences of the Oceans; 国際海洋物理科学協会)

IUGG関連では、昨年7月の第28回IUGG総会で設立された「IUGG総会の期間と構成を検討する作業部会」での議論を経て、近年10日前後で行われていたIUGG総会の期間を、今後は、7日+前後1日程度に短縮する方針が大筋で合意された。

一方、IAPSO関連では、2023年7月に新たな執行体制が発足してから、ECメンバーらによるオンライン会議が2回開催された。海洋科学に関する諸問題の最適な解決方法を探るBest Practice Study Groupsへの資金援助に関しては、2023年度分の採択を決定した上で、今後は採択基準を変更する方向で合意した。また、2025年に韓国・釜山において開催予定のIACS/IAMAS/IAPSO Joint Assembly 2025 (BACO-25)に関しては、これまでに開催された2回の実務者会議の内容を共有し、IAPSO単独セッションとIAMAS/IACSとの合同セッションの第一次案を急ぎ作成することが確認された。さらに、今年6月下旬から7月上旬にかけて韓国を訪問し、現地におけるBACO-25の準備状況に関する情報を収集するとともに、LOCへの積極的な協力を行っていく旨が日比谷から表明された。

IAPSOの国内対応体としては、これまで日本学術会議地球惑星科学委員会IUGG分科会IAPSO小委員会が設置されていたが、2023年10月から始まった日本学術会議第26期では小委員会を減らす方針となり、今後は日本海洋学会内に「IAPSO委員会」を設置して国際IAPSOへの対応等を進めていくこととなった。

(日比谷 紀之、升本 順夫)

9. AOGS (Asia Oceania Geosciences Society; アジア大洋州地球科学学会)

AOGS (Asia Oceania Geoscience Society; アジア大洋州地球科学学会)第21回アジア大洋州地球科学学会(AOGS)年会は、2024年6月23-28日に韓国平昌で開催される。海洋科学分野では21のセッションが開催される。発表申し込みは1月10日に締め切られたが、参加登録については随時受け付けている。年会の詳細については<https://www.asiaoceania.org/aogs2024>を参照されたい。今後の予定については、第22回AOGS年会在2025年7月28日(月)-8月1日(金)にシンガポール(マリーナベイサンズ)で実施される。また第23回年会については、2026年8月3日(月)-7日(金)に

福岡市(福岡国際会議場およびマリンメッセ福岡)で開催されることが、2024年3月のAOGS Council Meetingで決定された。第22回と23回年会についてはJAXA宇宙科学研究所の佐藤毅彦教授をPresidentとして今後開催準備が進められる。(堤 英輔)

10. SOLAS (Surface Ocean-Lower Atmospheric Study; 海洋大気物質相互作用研究計画)

2024年1月から国際SOLAS科学推進委員会(SSC)の共同議長にWilliam Miller博士(University of Georgia, 米)とChrista Marandino博士(GEOMER, 独)が就任した。また国内から北海道大学野村大樹会員がSSCメンバーに就任した。また2年に一度開催されているSOLASコミュニティの最大の会議となるOpen Science Conferenceが2024年11月にインド・ゴアで開催される予定である。国内からも多くの関係者が参加することを期待している。国内の活動としては、2023年7月に白鳳丸で実施したSOLAS-Japan Integrated Process Study in the western North Pacific (JIPS)航海(主席研究員: 東大大海研・濱崎 恒二会員)の成果報告会が、2024年3月7-8日に東京大学大気海洋研で開催される。(野村 大樹)

11. IMBeR (Integrated Marine Biosphere Research; 海洋生物圏の統合研究)

IMBeRの科学研究集会IMBeR-IMBIZO7「持続可能な海洋ガバナンスへの2030年までの移行: 取り組みと課題」が、2024年9月23-26日にラバト(モロッコ)で開催される。国内の活動としては、IMBeR-Japanに関連する白鳳丸研究航海(主席研究員: 東大大海研・齊藤 宏明会員)が、東部インド洋において2024年8月下旬-9月下旬に実施される。(山下 洋平)

12. GEOTRACES (An International Study of the Marine Biogeochemical Cycles of Trace Elements and their Isotopes; 海洋の微量元素・同位体による生物地球化学的研究)

GEOTRACESは微量元素・同位体の海洋生物地球化学循環を研究する国際計画である。日本から研究推進委員会(SSC)に西岡 純会員(2024年1月より共同議長)と近藤 能子会員が参加している。2023年9月に米国カリフォルニア州パロアルトで開催されたSSCではIDP 2025公開に向けた日程(データ提出最終締切: 2024年12月15日)や、新たに設置されるEarly Career Scientist (ECS)委員会の立ち上げ等について話し合われた。現在ESC委員の選考中で、年内には活動開始予定である。2024年2月に米国ルイジアナ州ニューオーリンズで開催されたOcean Sciences MeetingではGEOTRACES関連セッションが行われた。(近藤 能子)

13. OceanPredict (海洋予測に関する国際共同研究)

OceanPredictでは現在、「国連海洋科学の10年」海洋予測協同センターが主導している海洋予測システムの地理的な分布を概観する海洋予測システムアトラスと、海洋予測システムの成熟度を客観的に評価する仕組み(Operational Readiness Level for Ocean Forecasting)の構築に協力している。また、2024年11月18-22日にパリで開催するOceanPredict24シンポジウムについて発表申込を6月17日まで受け付けている。観測システム評価タスクケー

ムでは「国連海洋科学の10年」プロジェクト SynObs を推進しており、その一環として、世界各国機関の複数の海洋予測システムが共通の設定で観測システム実験(OSE)を行うフラッグシップ OSE を実施中である。(藤井 陽介)

14. PICES (North Pacific Marine Science Organization; 北太平洋海洋科学機関)

PICES が ICES と主催する、第7回国際動物プランクトン生産シンポジウムが、3月17-22日に、ホバート(オーストラリア)にて開催された。小針 統会員が運営委員を務め、平井 淳也会員が招待講演を行った。PICES が ICES、NOAA および水産研究教育機構と共に主催する、第2回海洋社会生態システムシンポジウム(MSEAS)が、2024年6月3-7日に横浜市にて開催される。長谷川 大介会員がコンビーナーを務める。2024年の年次会合「PICESの未来：2030年における持続性のための科学」は、10月26日-11月1日の予定で、ホノルル(米国)にて開催予定である。要旨および早期参加登録の締め切りは、6月15日となっている。(齊藤 宏明)

15. GO-SHIP (Global Ocean Ship-Based Hydrographic Investigation Program; 全球海洋各層観測調査プログラム)

2019年以来となる対面での GO-SHIP 委員会が 2024年2月16-17日はニューオーリンズ(米国)にて行われた。2013年以降の10年で10カ国から100以上のクルーズが GO-SHIP のもと行われ、55本の重要観測線のうち51本の観測に成功したことが報告された(図は https://www.go-ship.org/RefSecs/goship_ref_secs.html)。一方で、クルーズを計画時からデータ提出時まで電子的に追跡することができていないため、フロート投入などの相乗り観測効率化・データ提出状況モニターなどが遅れていること、各国で乗船観測技術の世代交代がうまくいっていないこと(とくにフロン)などが大きな問題として議論された。また、日本から提供している栄養塩の認定標準物質の継続が困難になっていることも喫緊の課題として挙げられた。近年米国や日本で開始されている微生物の観測を目的とする Bio GO-SHIP が紹介され、GO-SHIP としてサポートする意が示された。その他ワーキンググループ(データ・観測技法など)の進捗報告や19日に予定されているタウンホールミーティングなどの準備が行われた。本会議をもって JAMSTEC 所属の GO-SHIP 運営委員は勝又から重光に交代する。(勝又 勝郎)

16. NEAR-GOOS (North-East Asian Regional GOOS; 北東アジア地域海洋観測システム)

約4年ぶりとなる NEAR-GOOS 調整委員の会合(第21回)が2023年4月24日にタイ・バンコクで開催される。参加各国のリアルタイムデータベース・遅延データベース、及び各ワーキンググループ、各パイロットプロジェクトの活動状況の報告のほか、新議長(韓国の予定)、次回会合開催地と日にちなどの議論が予定されている。(笹野 大輔)

17. CLIVAR (Climate and Ocean— Variability, Predictability, and Change; 気候と海洋—変動・予測可能性・変化研究計画)

1) CDP (Climate Dynamics Panel; 気候力学パネル)

2025年の前半に Climate Dynamics Panel の 5th annual workshop の開催を目指し準備中である。開催地はオーストラリアを予定し、workshop のテーマは Weather & Climate Interactions (仮題)である。(佐々木 克徳)

2) IORP (Indian Ocean Regional Panel; インド洋海域パネル)

CLIVAR・インド洋地域パネル(IORP)の定例会合が3月6日にインドネシアのロンボク+オンラインのハイブリッド形式で開催された。会合では新メンバーの紹介に引き続き、現在 IORP 内のタスクチームが進めている OSSE (Observing System Simulation Experiment) の現状報告、および各国の観測プロジェクトの紹介が行われた。また、GOOS などの関連する各種国際プロジェクトとの連携の現状や、それらの今後の見通しについても意見交換が行われた。(木戸 晶一郎)

3) SSG (Scientific Steering Group)

CLIVAR SSG、北大・見延が Science Steering Group のメンバーとなった。任期は2024-2027年である。CLIVAR SSG では、新しい Research Focus の open call を行うことが議論されている。Research Focus はボトムアップで立案する CLIVAR における3年程度の年限付活動である。関心のある方は、ぜひ国際チームで立案を進めていただきたい。(見延 庄士郎)

18. GHRSSST (Group for High-Resolution Sea Surface Temperature; 高性能海面水温グループ)

第24回 GHRSSST 会合が、ISRO(インド宇宙研究機関)/SAC(宇宙応用センター)がインド・アフマダーバード開催のホストとなり、オンライン会議とのハイブリッドで2023年10月16-20日に開催された。欧米、オーストラリア、インドはじめ各国の宇宙、研究機関を中心に、オンラインを含めて230名が参加した。初日は「科学チーム会合」として各機関とタスクチームからの報告が行われ、その他の日は「SST ユーザーシンポジウム」として SST に関連する多様な研究成果が発表された。そこでは、次世代衛星観測への対応、GHRSSST 標準データ・フォーマットの次期バージョン検討、長期 SST データセット、機械学習の利用、海洋熱波などのテーマで発表や議論が行われた。第25回会合は2024年6月10-14日にカナダ・モントリオール(オンラインとのハイブリッド)で開催予定である。(坂本 圭)

19. SCOR WG #151 (Iron Model Intercomparison Project (FeMIP))

SCOR WG151 FeMIP は、2017年から海洋の鉄循環モデルを相互比較し、鉄循環の理解やモデルの改良を目指して活動してきた。2023年10月17-19日にエクアドルのグアヤキルで開催された SCOR 2023 年次総会で、FeMIP の活動の最終報告が行われた。報告では、2016年に発表された鉄循環モデルの相互比較データセットがリポジトリに公開されたこと、鉄循環モデルの再現性を評価するツールが開発されたこと、さらに海洋外からの鉄の供給に関する拘束条件や鉄の生物利用可能性に関する新たな知見が得られたことが報告された。また、鉄循環モデルをどの程度複雑に表現すべきかについて、3つの段階に分けたガイドラインも示された。FeMIP は今年が最終年であり、継続的な支援をしてくれた SCOR に対して感

謝の意が示された。

(三角 和弘)

20. SCOR WG #152 (Measuring Essential Climate Variables in Sea Ice (ECV-Ice) 海氷の生物地球化学に関する相互比較研究)

海氷の生物地球化学に関して相互比較研究を実施し、観測手法や観測データ品質の統一を目的としたワーキンググループである。2016年から開始し、サロマ湖(2016、2018、2019、2021)、イギリス・イーストアングリア大学 Roland von Glasgow sea ice chamber(2020)、つくば農環研(2020)、カナダ・ケンブリッジベイ(2022、2023)での国際共同観測を実施した。また、毎年、年会を実施してきた(コロナ中はオンライン)。現在は、実施した相互比較実験を取りまとめ、海氷の生物地球化学に関する指針の作成中である。2023年末をもって終了したが、一部の活動は BEPSII や Clce2Clouds(WG163)で継続予定である。2026年2-3月には BEPSII や Clce2Clouds 主催の国際 Sea Ice School を北海道サロマ湖で開催予定である。(野村 大樹)

21. SCOR WG #156 (Active Chlorophyll fluorescence for autonomous measurements of global marine primary productivity)

植物プランクトンの生体内クロロフィル蛍光を利用した基礎生産観測の国際標準化を目指したワーキンググループである。2018年より活動を開始し、カナダ・バンクーバーや米国・サンディエゴでのワークショップの開催、定期的なオンライン会議を行ってきた。2023年に活動を終え、その成果をまとめ、Application of single turnover active chlorophyll fluorescence for phytoplankton productivity measurements として公開した (<https://repository.oceanbestpractices.org/handle/11329/1585.2>)。(藤木 徹一)

22. SCOR WG #157 (Toward a new global view of marine zooplankton biodiversity based on DNA metabarcoding and reference DNA sequence databases (MetaZooGene))

2024年3月17-22日にオーストラリア・タスマニア州・ホバートで開催された 7th Zooplankton Production Symposium にて関連するセッション・ワークショップの企画を行った。またシンポジウム期間中にグループミーティングを行い、参加メンバーから進捗報告が行われた。(平井 惇也)

23. SCOR WG #163 (Coupling of ocean-ice-atmosphere processes: from sea-ice biogeochemistry to aerosols and Clouds (Clce2Clouds))

雪氷圏における大気-海氷-海洋での物質循環に関しての相互作用について理解することを目的としたワーキンググループである。2021年から開始し、定期的な zoom ミーティングを実施している。1年に1度の年会も実施している。2023年9月にはフランスのグレノーブルで年会を実施した。2024年は SOLAS OSC(インド)の開催時に対面の年会を実施する予定である。2026年2-3月には BEPSII との共催で国際 Sea Ice School を北海道サロマ湖で開催予定である。(野村 大樹)

24. SCOR WG #165 (Mixotrophy in the Oceans – Novel Experimental designs and Tools for a new trophic paradigm (MixONET))

海洋混合栄養生物のデータベースの拡充や同生物の生態学的重要性を評価するための新手法開発などが進められている。2023年11月14日および2024年3月12日にオンライン(Zoom)会議が開催され、出席者からプロジェクトの進捗報告があった。次回は5月14日に同様のオンライン会議が開かれる予定である。

(鈴木 光次)

25. SCOR WG #166 (Developing resource for the study of Methylated Sulfur compound cycling PROCesses in the ocean (DMS-PRO))

海洋における有機メチル化硫黄化合物の循環の包括的な理解を目指し、各プロセスの循環速度の標準的な分析手法の制定、品質管理されたデータベースの構築を進めるワーキンググループである。本ワーキンググループでは4つの部会を設定し、各部会ごとに数カ月に1回のウェブミーティング及びメールベースで議論を行っている。2024年2月下旬にウェビナーを開催し、本ワーキンググループの目的と今後の活動予定を海外の海洋硫黄物質循環コミュニティに紹介した。国内においては、2024年5月に開かれる JpGU にてポスター発表する予定である(5月28日火、セッション: A-CG41 [J] 海洋表層-大気間の生物地球化学)。(亀山 宗彦)

26. SCOR WG #168 (Coordinating the development of gridded four-dimensional data products from Biogeochemical-Argo observations (4D-BGC))

BGC Argo の観測データセットからグリッド化した4次元データプロダクトを作成し、モデルの改良を進め、生物地球化学の理解の深化を目指すワーキンググループである。SCORの2023年次総会で採択され、2024年2月に米国・ニューオリンズでキックオフ会議を開催した。(藤木 徹一)

27. WOA III (UN World Ocean Assessment 3rd Process; 国連第3次世界海洋アセスメント)

各章の執筆陣が概ね固まり、執筆が開始となる状況。2023年12月12-13日、パリのユネスコ本部で、国連本部の海洋及び海洋法局(DOALOS)の主催、IOCの共催で、「海洋科学と政策のインターフェース」と題するワークショップが行われた。WOA-IIIが刊行された際に浸透、特に制作関係者への浸透を図るための方策について意見交換が行われた。(道田 豊)

28. SOOS SOIS-RWG (The Southern Ocean Observing System Southern Ocean Indian Sector Regional Working Group)

2023年8月31日および12月14日に本RWGのニュースレターを発行した(タスマニア大学 山崎 開平氏が編集)。また、幅広い分野のコミュニティに本RWGへの参加を促す目的で、南大洋インド洋区の科学に焦点を当てたウェビナーの開催を計画している。最初のウェビナーは2024年3月開催予定であり、特に若手研究者の研究紹介を募集する予定である。(平澤 享)



情報 ⑩

Journal of Oceanography Most Cited Paper Award (JOMOCA)

Journal of Oceanography は、Journal of Oceanography(JO) に掲載されたすべての論文の中から、引用頻度の観点から最も優れていると判断される論文を、Journal of Oceanography Most Cited Paper Award (JOMOCA)として表彰することとなりました。

第一回、2024 年の表彰論文(2021 年に出版)は下記の 2 報です。筆頭著者へは表彰状が送られ、Springer-Nature より副賞(Springer Nature 社出版書籍のバウチャー 200 ユーロ)が送られます。おめでとうございます!

Iida, Y., Takatani, Y., Kojima, A., Ishii, M. Global trends of ocean CO₂ sink and ocean acidification: an observation-based reconstruction of surface ocean inorganic carbon variables. J

Oceanogr 77, 323–358 (2021). <https://doi.org/10.1007/s10872-020-00571-5>

Kida, S., Takayama, K., Sasaki, Y.N. et al. Increasing trend in Japan Sea Throughflow transport. J Oceanogr 77, 145–153 (2021). <https://doi.org/10.1007/s10872-020-00563-5>

JOMOCA の目的、選考基準等については、海洋学会ウェブサイトをご覧ください。

(https://kaiyo-gakkai.jp/jos/wp-content/uploads/2024/04/JO_Most_Cited_Paper_Award.pdf)



情報 ⑪

Journal of Oceanography 目次

Journal of Oceanography

Volume 80 · Number 2 · April 2024

ORIGINAL ARTICLES

Vortex pairs formed by tidal currents in the Naruto Strait: effects of bottom topography, density stratification, and coastline geometry
T. Nakamura · T. Yamaguchi · S. Nakada · Y. Matsumura 85

The behaviour of aluminium, manganese, iron, cobalt, and lead in the subarctic Pacific Ocean: boundary scavenging and temporal changes
C-Y. Chan · L. Zheng · Y. Sohrin 99

Temporal variation in vitamin B12 concentration and their impact

on phytoplankton composition of surface waters of a coastal ocean off Japan (Ariake Sea)

Y. Kondo · N. Takahashi · T. Takatani · T. Suzuki · M. Wada · S. Takeda · S. A. Sañudo-Wilhelmy 117

Dependence of drag coefficient on the spectral width of ocean waves
D. Zhao · M. Li 129

Spatial variability in wave characteristics along the eastern Arabian Sea
A. Anusree · M. M. Amrutha · V. Sanil Kumar 145



情報 ⑫

Oceanography in Japan 「海の研究」目次

33 巻 1, 2 号 2024 年 3 月

[2023 年度日本海洋学会岡田賞受賞記念論文]
深海乱流混合のパラメタリゼーションに関する研究

伊地知 敬

P1-16, 2024, doi: 10.5928/kaiyou.33.1 – 2_1
doi: 10.5928/kaiyou.32.5-6_95

[2023 年度日本海洋学会岡田賞受賞記念論文]
微量金属同位体比高精度分析法の開発とその海洋化学への応用

高野 祥太郎

P17-30, 2024, doi: 10.5928/kaiyou.33.1 – 2_17



情報 ⑬

「海洋学関連行事カレンダー」

JOSNL 編集委員 杉本 周作

COPAR 2024

日程：2024年7月13日(土)–21日(月)
会場：Busan, Korea
ウェブサイト：<https://cospar2024.org/>

雪氷研究大会 2024

日程：2024年9月16日(月)–19日(木)
会場：アモーレ長岡(新潟県長岡市)
ウェブサイト：<https://www.seppy.org/activity/meeting/>

日本海洋学会 2024年度 秋季大会

日程：2024年9月16日(月)–20日(金)
会場：東京海洋大学品川キャンパス(東京都品川区)

令和5年度 日本水産学会 秋季大会

日程：2024年9月24日(火)–27日(金)
会場：京都大学吉田キャンパス(京都府京都市)
ウェブサイト：<https://jsfs.jp/act/annual-meeting/>

日本流体力学会年会 2024

日程：2024年9月25日(火)–22日(金)
会場：フォレスト仙台(宮城県仙台市)
ウェブサイト：<https://www2.nagare.or.jp/nenkai2024/>

PICES 2024 Annual Meeting

日程：2024年10月26日(土)–11月1日(金)
会場：Honolulu, Hawaii, USA
ウェブサイト：<https://meetings.pices.int/meetings/annual/2024/pices/scope>

The 6th WCRP International Conference on Reanalysis

日程：2024年10月28日(月)–11月1日(金)
会場：東京大学伊藤国際学術研究センター(東京都文京区)
ウェブサイト：<https://confit.atlas.jp/guide/event/icr6/top>

SOLAS Open Science Conference 2024

日程：2024年11月10日(月)–14日(木)
会場：Goa, India
ウェブサイト：<https://solas-osc-2024.nio.res.in>

気象学会 2024年度 秋季大会

日程：2024年11月12日(火)–15日(金)
会場：つくば国際会議場(茨城県つくば市)
ウェブサイト：<https://sites.google.com/metsoc.or.jp/atm2024/home>

Ocean Predict Symposium 2024

日程：2024年11月18日(月)–22日(金)
会場：Paris, France
ウェブサイト：<https://oceanpredict.org/events/op24/#event-home>

2024年度 水産海洋学会

日程：2024年11月22日(金)–24日(日)
会場：静岡市(予定)

AGU Fall Meeting 2023

日程：2023年12月9日(月)–13日(金)
会場：Washington, D.C., USA
ウェブサイト：<https://www.agu.org/annual-meeting>

The 105th AMS Annual Meeting

日程：2025年1月12日(月)–16日(木)
会場：New Orleans, Louisiana, USA
ウェブサイト：<https://annual.ametsoc.org/index.cfm/2025/>



学会記事 ①

「日本海洋学会 2024年度 秋季大会」開催通知

水産研究・教育機構 水産資源研究所 亀田 卓彦

1. 大会実行委員会

委員長：西田 宏(水産研究・教育機構 水産資源研究所)
事務局長：亀田 卓彦(水産研究・教育機構 水産資源研究所)

問い合わせ先：jos2024fall@kaiyo-gakkai.jp

Web サイト：<https://www.jp-c.jp/jos/2024FM/>(6月下旬開設予定)

2. 日程

大会期日：2024年9月16日(月)－9月20日(金)

研究発表：2024年9月17日(火)－9月19日(木)

大会までの主な日程

セッション・シンポジウム等申し込み期限：	2024年5月24日(金)
大会ウェブサイトの公開：	6月下旬
大会参加の申し込み、及び研究発表の申し込みの受付開始：	6月24日(月)
研究発表の申し込み、及び要旨集原稿の提出締切：	7月15日(月)
プログラム公開：	8月下旬
大会・懇親会参加事前登録および大会参加費・懇親会費の事前納入期限：	8月23日(金)
参加料金の通常受付期間：	9月2日(月)－9月19日(木)

3. 会場

研究発表：東京海洋大学品川キャンパス

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7

アクセス：JR 線・京浜急行線品川駅港南口から徒歩約 10 分

東京モノレール天王洲アイル駅から徒歩約 15 分

りんかい線天王洲アイル駅から徒歩約 20 分

シンポジウム等：同上

4. 懇親会

日時：2024年9月18日(木) 18:00－20:00

場所：大学会館生協食堂(東京海洋大学品川キャンパス内)

5. 大会参加および研究発表申し込みの手順

要旨集は PDF ファイルで発行します。紙冊子の要旨集は発行しません。要旨集のみ必要な方も大会参加登録をしてください。

大会参加資格および研究発表資格は以下のとおりです。

- 大会はどなたでも参加できますが参加登録が必要です。大会参加費は会員と非会員で異なります。
- 大会での研究発表は、大会受付時に個人としての会員資格を有する方に限ります(入会申請中の者を含む)。この資格を有する方には、通常会員、学生会員、賛助会員、名誉会員、または終身会員資格のいずれかの区分の会員である個人が該当します。ただし、団体会員または賛助会員である団体に所属する方の場合は、1 団体につき 1 名に限り個人としての会員資格を有しない方も発表できるものとします。また、招待講演に限っては、会員資格を有しない方も発表できます。
- 団体会員または団体としての賛助会員の大会参加については、1 団体につき 2 名までは無料です。3 人目以降は非会員と同じ

参加費になります。

各種申し込みは大会参加事前登録ページ(<https://www.jp-c.jp/jos/www/index.php>)にて、次の 1) から 4) の項目に従って行ってください。

1) 大会参加の申し込み

スムーズな大会運営のため、できるだけ事前登録の期限である **8月23日(金)までに参加登録をお願いいたします**。会員で研究発表のない方も参加登録は必要ですのでご注意ください。

大会参加事前登録ページ(<https://www.jp-c.jp/jos/www/index.php>)において、新規に「ログインユーザー登録」することで参加の申し込みを行います。参加者 ID を半角英数字 4 文字以上 16 文字以内で任意に設定し、指示に従って申し込みをしてください。参加者 ID は、参加費振込の際に必要となります。郵送での申し込みは、原則受け付けていません。

2) 研究発表の申し込み

〔受付期間：6月24日(月)－7月15日(月)〕

「大会参加の申し込み」で登録した参加者 ID とパスワードで、大会参加事前登録ページにログインして研究発表の申し込みをしてください。

研究発表申し込みは、口頭発表、ポスター発表を通じて **1 会員につき 2 件まで**に限り、ただし、**同一セッション内では口頭発表は 1 件まで**とします。招待講演も通常の口頭発表と同様にカウントされます。

研究発表は、コンピーナーにより提案されたセッションから成り立ちます(セッションの提案方法については学会 HP に掲載されているコンピーナガイドラインをご覧ください)。研究発表を申し込む際には、発表のテーマに適したセッション(大会 HP に掲載)を選択してください。コンピーナーが提案したセッションのいずれのテーマにも合致しない発表については、プログラム編成委員会が用意する各分野(物理・化学・生物)または海洋科学総合領域の一般セッションを選択してください。

3) 大会参加費と懇親会費

参加費および懇親会費は下記のとおりです。**前納料金の受付締め切りは 8月23日(金)です。通常料金の受付期間は 9月2日(月)－9月19日(木) 12時**です。

費目	発表申込料 (1件あたり)	大会参加費		懇親会費	
		前納	通常	前納	通常
会員 / 納期					
通常会員	1,000	7,000	8,000	5,000	6,000
学生会員	1,000	3,000	4,000	3,000	4,000
学部生	1,000	無料	無料	3,000	4,000
非会員	—	9,000	10,000	5,000	6,000
非会員 (招待講演者)	1,000	7,000	8,000	5,000	6,000
名誉会員	無料	無料	無料	無料	無料

(単位：円)

- 団体会員または団体としての賛助会員の大会参加については、1 団体につき 2 名までは無料です。3 人目以降は非会員と同じ参加費になります。

大会参加費はクレジットカード、または銀行振込にてお支払いください。大会 HP からのクレジットカードによるお支払いは、VISA、Master、JCB、AMEX が使用可能です。銀行振込の際には、必ずご本人名(フルネーム)の前に参加者 ID(参加申し込み時に大会 HP で設定する)をお付けください。振り込み手数料は振り込み者をご負担ください。金融機関振り込みの振込先については大会事務局までお問い合わせください。

なお、納付された参加費等は返却いたしません。

4) 要旨集原稿の作成要領

口頭発表、ポスター発表とも、要旨集原稿の締め切りは 7 月 15 日(月)です。研究発表の申し込みの締め切りと同じです。締め切り後の変更は受け付けません。

- 研究の目的、方法、結果、解釈などを、わかりやすく書いてください。
- 要旨集原稿は『A4 判 1 枚』とします。
- 要旨集原稿は作成上の注意事項(大会 HP に掲載)を参照して作成してください。カラーも可ですが、ファイルサイズは出来るだけ小さくしてください。
- Web による発表申し込みの際、「講演題目」、「講演者」に続いて、「発表内容の抄録」を提出していただくことになっています。「抄録」は、日本語全角で 300 文字以内(半角英数字は 0.5 文字扱い)です。この「抄録」は、通常の講演要旨とは別に作成していただくもので、JST(科学技術振興機構)が管理する文献データベースに登録されます。
- 要旨集原稿は、大会 HP の研究発表の申し込みページからアップロードしてください。ファイルは PDF とし、ファイル容量は 8MB 以下としてください。
- 郵送での原稿送付は、受け付けません。

5) 発表形式および制限

- 発表形式は、口頭またはポスターのいずれかを選んでください。コンビナーの裁量により、発表申し込み者の当初希望とは異なる発表形式に変更される可能性があります。
- 口頭発表の時間は、討論も含めて 15 分の予定です。これは招待講演についても同じです。
- 口頭発表を予定している参加者は、原則としてパソコンを持参してください。発表者にパソコンを用意できない事情がある場合、事前にコンビナーにご相談ください。
- ポスター発表では、会期中に 1 時間 30 分程度のポスター会場

での立ち合い説明時間を用意する予定です。ポスターの大きさは、A0 に準じたサイズで縦置きです(後日、詳しく案内します)。口頭による内容紹介を行うための時間を特別に割り当てる予定はありません。

6) 若手優秀発表賞

本年度の秋季大会では、若手研究者を励ます一助として、学生会員または若手通常会員が、自ら説明を行った口頭発表およびポスター発表の中から、それぞれ数件を選考し若手優秀発表賞を授与します。また、受賞者の氏名等を学会ホームページと学会ニュースレターで公開します。なお、今大会における若手通常会員とは、2024 年 9 月末日時点で 30 歳未満または博士の学位取得後 3 年未満であることを目安とします。なお、研究発表申し込み時に若手優秀発表賞の対象となることを希望した会員に限定して審査します。

6. シンポジウム等

2024 年 9 月 16 日(月)および 20 日(金)にシンポジウム、大会期間中(16-20 日)の夕刻 2 時間程度にナイトセッション、また大会会期中の適当な時間帯にイベントを開催することが可能です。これらシンポジウム・ナイトセッション・イベント(以下シンポジウム等)の日程は大会スケジュールにより変更の可能性があります。採択件数の多い場合には複数のシンポジウム等を並行して行います。シンポジウム等に限り、会員以外の方も大会参加手続きをせずに参加(発表・聴講)することが可能です。シンポジウム等以外の研究発表等を聴講する場合には、大会参加手続きが必要となります。

7. その他

1) 一時保育

本大会に参加するために一時保育施設を利用する会員には、大会実行委員会が保育料等の一部を補助する予定ですが、学会の一般社団法人化に伴い昨年度までの予算措置が可能かどうか検討中です。詳細は後日、学会メーリングリストなどでお知らせします。

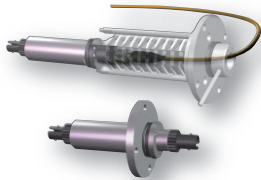
2) 賛助・展示・広告の募集

大会実行委員会では、本大会に賛助、機器・書籍などの展示、および講演要旨集に広告を掲載して頂ける企業・団体を募集します。また、研究プロジェクト等のアウトリーチのための展示も歓迎いたします。展示期間は研究発表期間中の 9 月 17 日(火) - 9 月 19 日(木)、展示会場はポスター会場と同じ部屋にする予定です。奮ってお申込みください。申し込み締め切りは 7 月 8 日(月)、広告原稿の提出期限は 7 月 15 日(月)です。

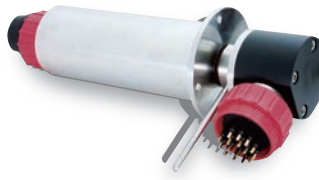
FOCAL™

フォーカル社
(カナダ)

光通信用
ロータリージョイント



水中スリッリング



光モニタリングシステム
& マルチプレクサ



Tritech
Official Distributor

超小型軽量水中ソナー

DMD
ダイバーマウントディスプレイ

トライテック社
(イギリス)



Micron Gemini



Gemini 1200 ik



Micron Sonar



GISMA
STECKVERBINDER
GMBH



水中コネクタ 防水から深海まで



ジスマ社
(ドイツ)



Series 80



Series 10



Series 35



Series 40

MacArtney
UNDERWATER TECHNOLOGY

マッカートニー社
(デンマーク)

水中コネクタ SubConnシリーズ



Circularシリーズ



イーサネット用



パワー用

丸紅エレクトロニクス株式会社

製品に関するご質問等は弊社営業担当までご連絡ください。
t-omata@m-elenext.co.jp





学会記事 ②

2025年度 日本海洋学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼

2025年度 日本海洋学会学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者選考委員会 委員長 大島 慶一郎

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会(以下、賞候補者選考委員会という)では、これら三賞の2025年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただけますよう、お願い申し上げます。

岡田賞につきましては、2024年度から、ライフイベントなどにより研究活動の空白期間がある36歳以上の会員も推薦していただけるようになりました。宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。各賞とも、女性候補者の推薦を歓迎します。

なお、各賞候補者の選考は、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目1～6について、A4版用紙1枚に記入し、電子メールにてお送りください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからダウンロードできます。

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards

1. 候補者の氏名と所属機関

(岡田賞の場合は、生年月日も記入してください)

2. 受賞の対象となる研究課題

(宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育、あるいは啓発に関する業績)

3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文(宇田賞の場合は省略可)

5. 推薦者の氏名および所属機関と電子メールアドレス

6. 推薦日付

審査の際の参考とするため、各候補者の略歴と、学会賞、岡田賞の受賞候補者については業績リストを、宇田賞については推薦対象課題に関する資料を、編集可能なマイクロソフト・ワードの電子ファイルとして、電子メールに添付してお送りいただきますようお願いいたします。

締切日：2024年8月30日(金)必着

送付先：電子メールの件名を「日本海洋学会 2025年度 賞候補者の推薦」とし、jos@mynavi.jp宛にお送りください。なお、添付ファイルには必ずパスワードを設定していただき、パスワードは別の電子メールで送信をお願いいたします。

〈参考資料〉

一般社団法人 日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞細則(抄)

第1条 この細則は一般社団法人日本海洋学会による表彰のうち、会員の研究業績の表彰及び研究の奨励のため設ける日本海洋学会賞(以下、「学会賞」という)及び日本海洋学会岡田賞(以下、「岡田賞」という)、ならびに海洋学の発展に大きく貢献した会員を表彰するため設ける日本海洋学会宇田賞(以下、「宇田賞」という)の選考に関する規定を定める。

2)学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。

3)岡田賞は受賞の年度の初めに(4月1日現在)原則として36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。ただし、当該会員のライフイベント等による研究活動の空白期間を考慮し、年齢制限を緩和することができる。

4)宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓発や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。(以下省略)

Call for Nominations for FY2025 Oceanographic Society of Japan Research Awards

The Oceanographic Society of Japan (JOS) announces the call for nominations for its three awards in recognition of achievements in oceanographic research. Nominees and nominators must be members of the JOS.

1. The JOS Prize

The JOS Prize, the Prize of the Oceanographic Society of Japan, is awarded to a member of the Society who has made outstanding contributions to the advancement of oceanography. The JOS Prize is awarded to one recipient each year.

2. The Okada Prize

In memory of the late Professor Takematsu Okada, the Okada Prize is awarded to young members of the Society who have made outstanding contributions to the advancement of oceanography. The

Okada Prize is awarded to up to two recipients each year.

In principle, members younger than 36 years of age on April 1 of the award year (2025) are eligible for nomination. Beginning with the award in FY2025, members 36 years of age or older who have a gap in research activity prior to age 36 due to life events, etc. are also eligible.

3. The Uda Prize

In memory of the late Professor Michitaka Uda, the Uda Prize is awarded to a member of the Society who has made a significant contribution to the advancement of oceanography, either through outstanding leadership of a research group, or through outstanding roles in educational outreach or technical support. The Uda Prize is awarded to several recipients each year.

Nominators are also encouraged to nominate candidates who were nominated last year but did not win an award.

Winners of these awards will be selected from the nominees by the nominators and the Awards Committee.

Nominations must be written in English or Japanese and should include the following information:

- The nominee's full name, date of birth (for the Okada Prize only), and affiliation.
- The nominee's research topic for the award.
- A description of the nominee's research achievements.

- A list of the nominee's major publications (not required for the Uda Prize).
- Nominator's full name, affiliation, and e-mail address.
- Date of nomination.

The form of nomination for each prize is available from JOS's website at:

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards

Please also send a short curriculum vitae for each nominee, a list of publications for the JOS Prize and the Okada Prize, and reference materials for the Uda Prize, as editable Microsoft Word files attached to an e-mail. We welcome nominations of female candidates for all awards.

Please submit your nomination to:

jos@mynavi.jp [Subject: Nominations for FY2025 JOS Research Awards]

Please be sure to set a password for the attached file and send the password in a separate email.

Deadline : August 30, 2024

Kay I. Ohshima

Chair, 2025 Awards Committee of the Oceanographic Society of Japan



学会記事 ③

2025年度 日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼

2025年度 日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者選考委員会 委員長 安中 さやか

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会(以下、選考委員会という)では、2025年度環境科学賞の受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けます。

本賞は、海洋環境問題に関わる学術研究の発展、社会実装、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するものです。これらの活動への会員の参加を促すために、論文はいうまでもなく論文の形になり難い貴重な調査、提案、解説、啓発的活動その他を含めて学会として認め、評価できる方策を考えねばならないとの議論に賛同された故宇野木名誉会員とご家族様より頂いた寄付を基に制定されました。詳しい経緯、目的等に関しましては、学会HPに掲載の日本海洋学会環境科学賞「設立趣旨」(http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards)、または会則第6章第37条をご参照下さい。

本賞の選考にあたっては専門性を背景とした活動内容の意義が重

視されます。受賞候補者の選考は、会員の皆様からの推薦(自薦可)と選考委員会からの推薦を併せた中から行い、多数の候補者が推薦された場合は若手研究者を優先いたします。本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目について記入し、下記の送付先まで郵送またはメールにてお送りください。

1. 候補者の氏名と所属機関・役職名
2. 推薦の対象となる活動
3. 活動内容などを含めた推薦理由
4. 推薦者(自薦含む)の氏名、所属機関、メールアドレス、推薦日付
5. 参考となる研究業績(論文リストなど)

締切日：2024年9月6日(金)必着

送付先：<郵送> 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
パレスサイドビル
(株) 毎日学術フォーラム内
日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会
<メール> 件名を「海洋環境科学賞受賞候補者の推薦」とし、下記宛に送信
jos@mynavi.jp

現在までの受賞者

2010年度 清野 聡子 / 2011年度 梅澤 有 / 2012年度 速水 祐一 / 2013年度 栗原 晴子 / 2014年度 神田 穰太 / 2015年度 野村 英明 / 2016年度 藤井 直紀 / 2017年度 一見 和彦 / 2018年度 張 勁 / 2019年度 福田 秀樹 / 2020年度 河宮 未知生 / 2021年度 中嶋 亮太 / 2022年度 藤井 賢彦 / 2023年度 安中 さやか / 2024年度 中野 善之

Announcement of nomination for the Environmental Science Prize of the Oceanographic Society of Japan

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is receiving nominations for the JOS Environmental Science Prize which will be awarded at the 2025 JOS spring meeting.

The JOS Environmental Science Prize is awarded to member(s) of the Society who has made outstanding contributions to the progress of academic research, social implementation, enlightenment and/or educational outreach related to marine environmental problems. It was established based on donations from the late Honorary Member Unoki and his family, who supported the discussion that the Society must consider ways to recognize and value not only scientific papers, but also basic research, proposals, commentary, educational activities, and others that are difficult to be expressed in scientific paper form, as well. For details and purposes of the establishment of the award, please refer to “the purpose of establishment” of the Award on the Society’s website (http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards) or Chapter 6, Article 37 of the Rules of the Society.

In the selection process, emphasis is placed on the significance of the nominee’s activities based on his/her expertise. Candidates for the award are selected from a combination of recommendations from JOS members (self-recommendation is possible) and those from the selection committee. If a large number of candidates are recommended, young researchers will be given priority. We encourage you to

recommend outstanding members worthy of this award.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings.

1. The nominee’s full name, affiliation and title
2. The nominee’s activity subject for the prize
3. Description of the nominee’s achievements for the prize
4. The nominator (*)’s full name, affiliation, email address and date of submission *Self-nomination is possible
5. List of nominee’s relevant scientific achievements, e.g., publications

Please send the recommendation by mail or e-mail to
Award Committee of JOS Environmental Science Prize
Mainichi Academic Forum, Floor-9, Palace-side Building
1-1-1 Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-0003, Japan
jos@mynavi.jp [Subject: the Environmental Science Prize of JOS]

Deadline: Applications must reach us no later than September 6th, 2024

The winners in the past

2010 Satoko Seino / 2011 Yu Umezawa / 2012 Yuichi Hayami / 2013 Haruko Kurihara / 2014 Jyota Kanda / 2015 Hideaki Nomura / 2016 Naoki Fujii / 2017 Kazuhiko Ichimi / 2018 Jing Zhang / 2019 Hideki Fukuda / 2020 Michio Kawamiya / 2021 Ryota Nakajima / 2022 Masahiko Fujii / 2023 Sayaka Yasunaka / 2024 Yoshiyuki Nakano



学会記事 ④

2025年度 日本海洋学会 吉田賞 受賞候補者の推薦依頼

2025年度 日本海洋学会 吉田賞 受賞候補者選考委員会 委員長 植松 光夫

日本海洋学会会員の皆様、

2023年度より、日本海洋学会に「海洋湧昇に関連する諸現象についての優れた研究業績を表彰する」新たな賞として吉田賞が創設されました。本年度も、本賞の受賞候補者を選考するため、「2025年度吉田賞受賞候補者選考委員会(以下吉田賞選考委員会という)」

が設置され、受賞候補者選考を会長より依頼されました。

吉田賞は、物理的な諸現象だけでなく、化学的、生物学的な諸現象や、これらの諸現象が生物や生態系におよぼす影響なども含めて、湧昇に関連するできるだけ広い分野の研究を表彰対象としております。また、表彰は会員に限定せず、国内外の全ての研究者を

対象としています。このような国際的な賞により、広く海外の研究を含め、またこれまで日本海洋学会において主な研究対象となっていなかった分野も含めて、日本海洋学会において表彰するという趣旨となっています。

本委員会では、吉田賞の2025年度受賞候補者について、日本海洋学会員の皆様から広く推薦を受け付けることといたします。

下記の推薦要領に従って、吉田賞にふさわしい候補者を積極的に推薦いただきますよう、お願い申し上げます。吉田賞選考委員会では女性研究者の推薦を歓迎致します。

なお、連名によるご推薦も歓迎しますが、推薦代表者は日本海洋学会員の方をお願いいたします(共同推薦者については、会員・非会員を問いません。お名前など、推薦用紙の推薦者氏名欄にご追記ください。もし共同推薦者による推薦理由文のある場合は、推薦理由欄に追記するなど、推薦代表者の方に適宜取りまとめをお願いいたします)。

吉田賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からのご推薦と吉田賞選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えます。

【推薦要領】

以下の1~6の項目について、推薦用紙の書式に従って取りまとめ、電子ファイル化して、電子メールにてお送りください。

1. 候補者の氏名および所属機関
2. 受賞の対象となる研究課題

Call for nominations for the Yoshida Award (FY2025)

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is soliciting nominations for the Yoshida Award established in 2022 to commemorate the late Professor Kozo Yoshida for his pioneering research on ocean upwelling.

The Yoshida Award is granted to a researcher in recognition of their outstanding contributions to the advancement of ocean upwelling research, broadly defined, including physical, chemical, and biological phenomena and their effects on climate and ecosystems. JOS membership is not required for nominees, while lead nominators must be members of JOS. Nomination by a group including a non-JOS member is acceptable.

Nominations are considered by the Yoshida Award Selection Committee, which selects one finalist for approval by JOS Council.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings:

- The nominee's full name and affiliation
- The nominee's research subject
- Description of the nominee's research achievements
- List of the nominee's key publications

3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文

5. 推薦者の氏名および所属機関と電子メールアドレス

6. 推薦者署名と推薦日付

推薦用紙(マイクロソフト・ワード形式)は、以下のリンクよりダウンロードできます。

https://kaiyo-gakkai.jp/jos/archives/jos_announce/11078

なお、審査の際の参考とするため、推薦用紙とは別に、候補者の略歴と業績リストを、PDF形式及び編集可能なマイクロソフト・ワード形式の電子ファイルとして、下記の送付先(学会事務局)へ電子メールに添付してお送りください。

締切日：2024年8月23日(金)必着

送付先：件名を「日本海洋学会2025年度吉田賞候補者の推薦」とし、jos@mynavi.jp宛にお送りください。なお、添付ファイルには必ずパスワードを設定していただき、パスワードは別のメールで送信下さるようお願いいたします。

〈参考資料〉

一般社団法人日本海洋学会 吉田賞細則(抄)

第1条 この細則は一般社団法人日本海洋学会による表彰のうち、海洋湧昇に関連する諸現象についての優れた研究業績の表彰のため設ける日本海洋学会吉田賞(以下、「吉田賞」という)の選考に関する規定を定める。

第4条 選考委員会は受賞候補者1件以内を選び、12月末までに選定理由をつけて会長に報告する。

-The nominator's full name, affiliation, and e-mail address

-Signature of the nominator and the nomination date

Nomination form (Microsoft-Word) can be downloaded from the following link.

https://kaiyo-gakkai.jp/jos/en/archives/jos_announce/11078

Please also send a short curriculum vitae and a list of publications of the nominee, both as editable Microsoft-Word files attached to an e-mail.

We welcome nominations of female candidates.

Please send the nomination package by e-mail to jos@mynavi.jp [Subject: Nominations for the FY2025 Yoshida Award of JOS]

Please make sure to set a password for the attached file and send the password in a separate e-mail.

Deadline for nominations: August 23, 2024

Selection Committee of the 2025 Yoshida Award: Mitsuo UEMATSU, Chair

アカデミア メランコリア (第42回) (若手のコラム)

富山大学大学院 理工学教育部 大塚 進平

今回のコラムを担当する富山大学大学院理工学教育部の大塚 進平と申します。前回担当された電力中央研究所の西澤 紗希さんは、所属研究室の先輩で、「長崎丸」での初めての海洋観測も含め、海洋観測のいろはを教えてくださいました。このような形で、執筆の機会をいただけたこと大変嬉しく思います。

私は昨年から博士課程に進学し、富山大学の張 勁教授の指導の下で、「富山深海長谷における水塊構造と時空間的な物質輸送変動の解明」をテーマに研究を行っています。これまで年に2、3回の頻度で航海に参加し、研究上、日本海を訪れることが多いですが、東シナ海や東北沖、北太平洋など、様々な海洋観測にも乗船する機会を頂きました。その度に、分野や所属の異なる多くの研究者との出会いがあり、貴重な体験をさせていただきました。博士課程2年という将来を考える時期ではありますが、改めて、博士課程に至る経緯を振り返り、これからの研究活動と向き合いたいと思います。

思い返すと、現在の研究室を選ぶきっかけは、入学時の理学部ホームページの「メタンハイドレート」の記事だったと思います。富山湾周辺の身近な場所で調査ができる、これがやりたいと漠然としたものでしたが、4年後、本当にその記事の執筆者である現指導教員の研究室に入っていました。学部時代の海洋化学の講義では、福島第一原子力発電所事故で放出された放射性物質が海水流動のトレーサーとなっていることなど、海洋化学のフロンティアに触れ、分野による視点の違いや環境試料から未知の現象を読み解く研究に非常に関心を持ったことを覚えています。

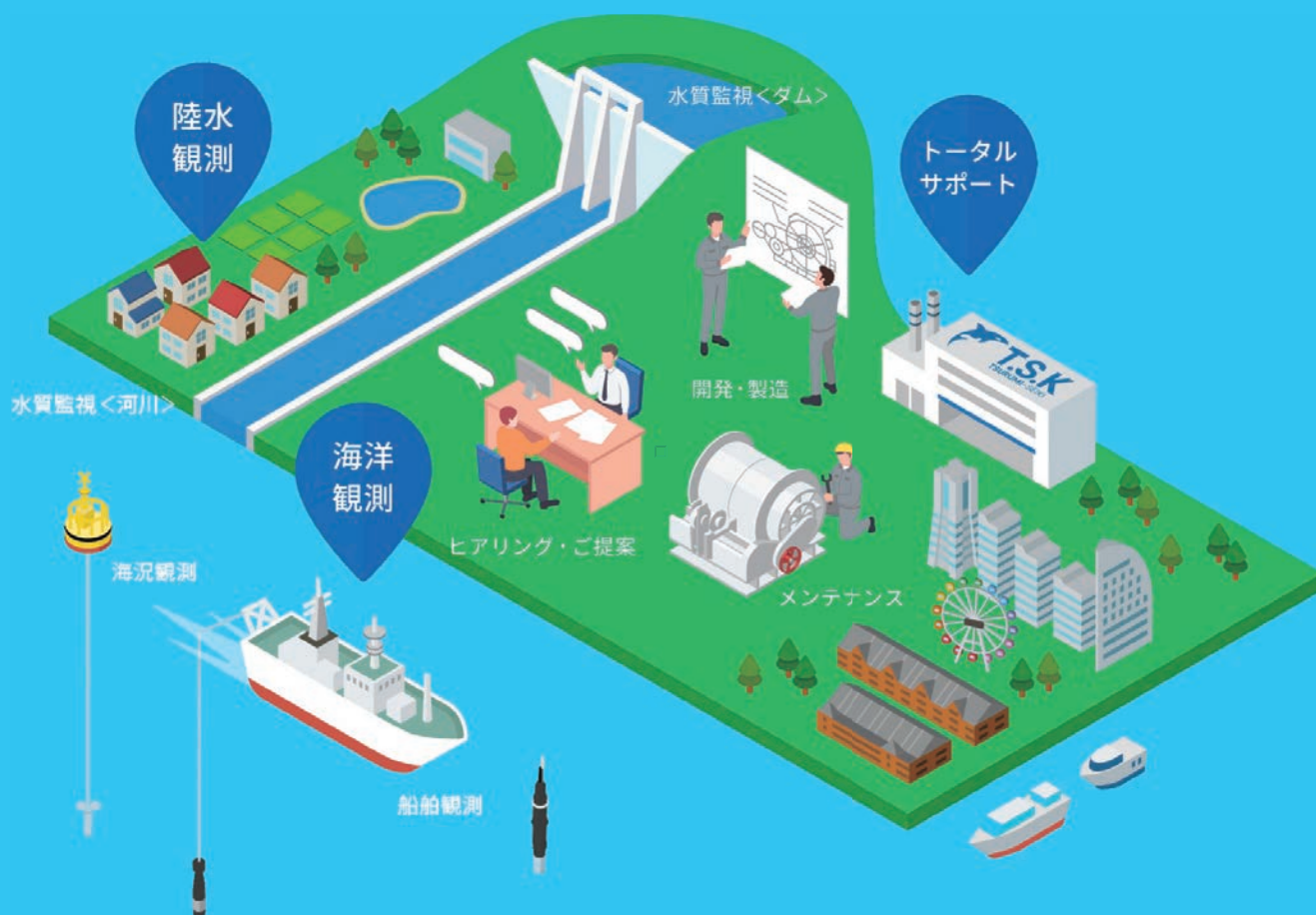
研究室に入った直後は、コロナ禍初期で思うように研究が進みませんでした。タイミングにも恵まれ、様々な海洋観測をこなしていく中で、知らず知らずの内に、海洋学の奥深い分野に入り込んでいた気がします。海洋の中でも、特に深海は、宇宙よりも遠い存在と例えられるように、「暗黒・低温・高圧」の極限の世界です。そんな未知のフィールドに挑戦し、化学分析の応用と想像力で、自然界に潜む謎に迫っていくことが、学問のおもしろさだと感じています。

先月は、研究調査船「白鳳丸」に乗船し、能登半島緊急航海に参加する機会をいただきました。偶然にも、調査を頻繁に行っていた研究海域と能登半島地震の震源域が近く、地震前後の海洋環境の変化を明らかにできるのではないかと、期待しています。私自身、東北の地で被災経験があり、北陸で学ぶ一研究生として、能登半島地震・津波が海洋環境に与えた影響について、少しでも調査に貢献できればと思います。

最後に、これまで好機や人脈に恵まれ、コロナ禍にもかかわらず多くの海洋観測に参加することができました。船の乗組員や多くの研究関係者に感謝を申し上げるとともに、様々な経験を糧にして、より一層研究活動に励み、一歩ずつ前進していきたいと思っています。



終わりになき航海の パートナーとして。



海洋・陸水・大気観測における調査活動に
正しい知見と洞察を提供します。

株式会社 鶴見精機

<https://tsurumi-seiki.co.jp/>
sales@tsk-jp.com

本社・横浜工場サービスセンター

神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央二丁目2番20号
TEL: 045-521-5252 FAX: 045-521-1717

TSK America, Inc.

P.O. Box 70648 Seattle, WA 98127 USA
Phone : +1-206-257-4899
e-mail : tony@tsk-jp.com

水中測器製造部門(白河)

福島県白河市大信中新城字弥平田17-5
TEL : 0248-46-3131

リエゾンオフィス(インド)

Liaison Office (INDIA)
Level-12, Building No.8, Tower-C
DLF Cyber City-II, Gurgaon-122002
Haryana, India
Phone : +91 - 9810173319, 9560264316
e-mail : tskl@tsk-jp.com

編集後記



5月の連休明けから10日間、チリへの出張がありました。チリ出張は今回で2回目です。季節は日本と真逆で初冬であり、チリの首都・サンチアゴの国際空港からは雪化粧したアンデス山脈を眺めることができました。目的地はサンチアゴから国内便で南に1時間ほどのテムコという街でした。ここを拠点に、現地のラフロンテラ大学と広島大学との共同セミナーに参加したり、沿岸部からアルゼンチン国境に近い高原にかけてチリを横断するようなルート上での大気サンプリングに参加したりしました。

チリと日本の時差は13時間であり、睡眠時間を削れば日本で開催されるオンライン会議やセミナーに参加することができます。しかし、往路でもらった風邪を夜なべした結果こじらせてしまい、帰国後もしばらく咳に悩まされました。また、着替えやお土産を入れた預け荷物が帰路で行方不明になりましたが、5日後に乗継地のシドニーで見つかり、無事に宅配便で手元に戻ってきました。私は普段あまり土産を買わない方なのですが、今回は珍しく香辛料やまな板、毛糸のチョッキなどを、チリ先住民マップチェ族のマーケットで

買い込んでいたので、ほっとしました。

5月の下旬にはJpGU会期中に海洋学会の春季大会が幕張で開催されました。私が参加したセッションでは、口頭発表者の全員が現地参加で、コロナ前の学会風景が戻ってきたように感じました。また、本号では、若手海外渡航援助を利用したOcean Science Meeting(米国・ニューオーリンズ)への参加報告記事が5件掲載されています。編集長を務めて4年目ですが、これほど多くの若手研究者の渡航報告記事を掲載できたのは初めてで、大変嬉しく感じています。

なお、冒頭の会長挨拶文にもありますように、学会が法人化し、ニュースレターの誌面にも些細な変化があります。このページの下部にある学会ロゴに「一般社団法人」の文字が加わりました。記事の中にはチェックが行き届いておらず、変更されていない箇所があるかもしれません。お気づきの点がございましたら、遠慮なく編集委員長までご連絡ください。(編集委員長 岩本 洋子)

広告募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。
海洋学に関連する機器や書籍の広告を募集しています。
お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学大学院統合生命科学研究科
電話/FAX 082-424-4568 /メール y-iwamoto@hiroshima-u.ac.jp

JOS News Letter

JOSニュースレター
第14巻第1号 2024年6月1日発行

編集 JOSNL 編集委員会

委員長 岩本 洋子 委員 杉本周作、張 勁、中田 薫

〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1

広島大学大学院統合生命科学研究科

電話/FAX 082-424-4568

メール y-iwamoto@hiroshima-u.ac.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

http://www.smash-web.jp

発行  一般社団法人
日本海洋学会
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

(写真の説明)

寄稿のタイトル横の写真は、2022年の白鳳丸慣熟航海で撮影されたものです(竹内 誠会員提供)。その他の写真は編集委員長が外航中に撮影したものです。会員からの写真を随時募集しています。

ISSN 2758-8645